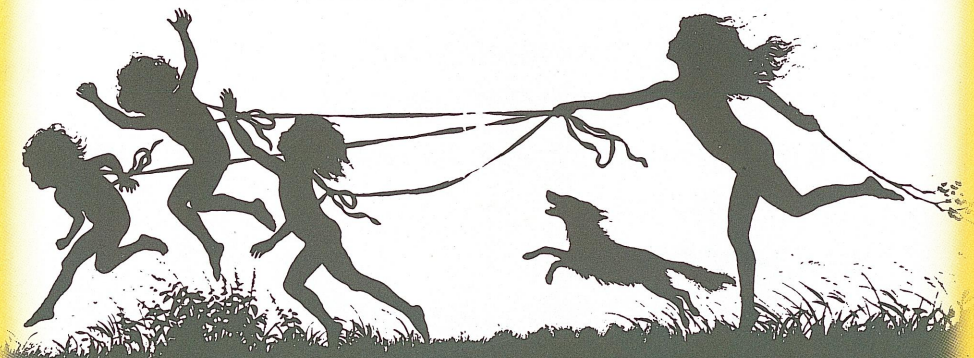


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

5



第八十四卷 第五号 日本幼稚園協会

保育の再点検〈全5巻〉

平井信義・大場牧夫・森上史朗 著



- ①望ましい生活習慣
- ②望ましい集団づくり
- ③望ましい当番活動
- ④望ましい行事と生活
- ⑤望ましい言葉の指導

「保育の再点検」の大きなねらいは、社会性の育成にあります。子どもの社会性を育てるにはどのような保育をしたらよいかとお考えの先生方に、きっと役立つ〈全5巻〉です。

本シリーズの特色は、

- 日常的で身近なテーマをとりあげています。
- 保育事例を分析し納得いくまで話し合われています。
- 現場からの声として、よその園の保育が紹介されています。

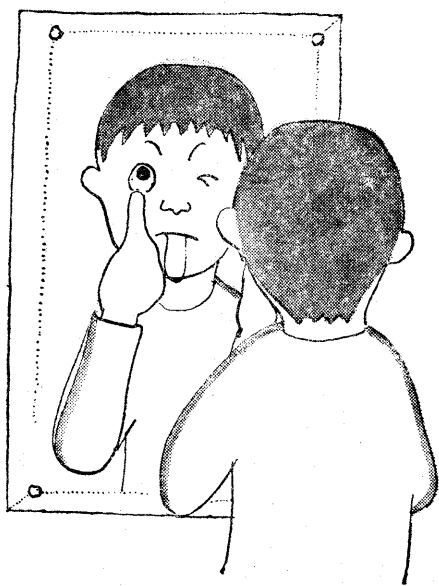
A5判・セットケース入り・各208頁・セット定価6,750円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

幼児の教育



第八十四卷 第五号

幼児の教育 目次

—第八十四巻 第五号—

© 1985

日本幼稚園協会

子供の成長と発達……………森田 宗一…(4)

養護学校の日々……………津守 真…(7)

SF的読み解き 子どもという風景

第四回 アリストテレスとおばあちゃんたち……………堀内 守…(13)

近代短歌に現われた子ども(二十五)……………大塚 雅彦…(23)

子どもたちのこと……………大橋利恵子…(31)



現場報告 幼稚園と男性教師……………由井 正人…(34)

いろいろなことを教えてくれる子どもたち……………村石 京子…(40)

兎園隨筆⑧ 貝殻……………蕪木 寿江…(46)

教育実習ノート……………(50)

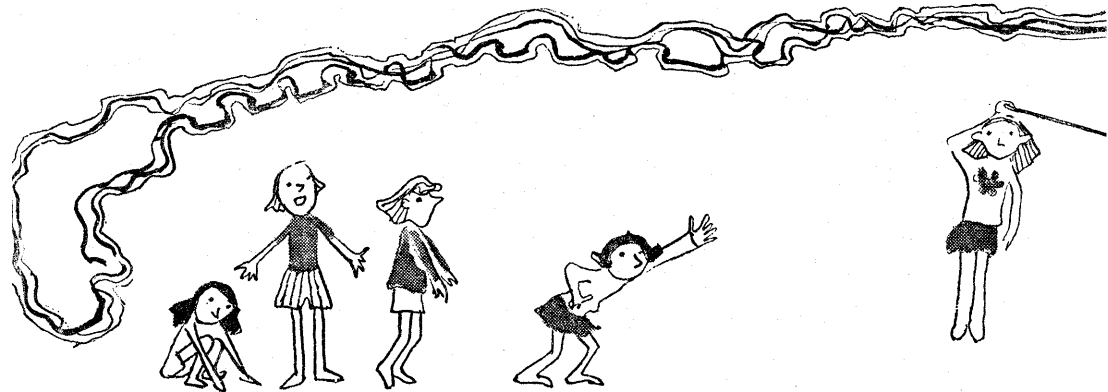
「親の姿」いろいろ……………村田 修子…(53)

雨の日ってどんな臭い——オーストラリアの

テレビ・ラジオのプレーブック紹介……………小澤 誉子…(59)

表紙絵・『ヨーロッパのきりがみと影絵』(岩崎美術社刊) より

カット・福田理恵



子どもの成長と発達

森田宗一

“わたしは六つになった”という題の次のようなすばらしい詩があります。イギリスのアラン・アレキサンダー・ミルンという人の詩です。私は幼少の子供を見るたびに、いつもこの詩を思い、この詩を読むごとに、子供のすばらしい成長と発達の姿を思うのです。

一つのときは
なにもかも はじめてだった

二つのときは
わたしは まるっきりしんまいだった

三つのときは
ようやく わたしになった

四つのときには
わたしは大きくなりましたかった

五つのときは
なにもかも おもしろかった

いま六つで
わたしはありったけ おりこうです
だから いつまでも六つでありたい

一歳時は、人間（幼児）の最初の成長の峠です。

おぼつかないながら立つて歩き、手を使い、心も体も人類としての動きを始めるのです。人間としての新しい出発です。生まれてから一、二歳時までの頃は、何といっても母親が絶対者です。母の胎内の延長線に在るみたいです。母親との濃密なふれ合いが非常に大切です。母子は電波のように通じ合い、母親の感情の動き、母子の肌触れ合う溢れるような愛情が、人間の一生の基礎になるといっても過言ではありません。

三歳時ともなると、“三つ子の魂”ともいわれるように、そろそろ自我が目芽え、誰もふみこむことのできない、その子ならではの個性がはっきりしてきます。親の手もとを離れ、自立して子供自身の世界、遊びの世界を求めるようになります。

“三つのときは、ようやくわたしになった”この表現は、すばらしいと思います。

三歳の峠から六歳時までは、体も心も、次の段階を目指して愈々活潑に発達をします。何もかも“おもしろく”ただ“大きくなりたい”願のあらわれがよく見られます。

さて六つともなれば、子供の“わたし”はおおよそできあがるのです。子供ながらに次の社会人を目指して自立訓練の時です。親兄弟だけでなく、よそのおとなやお友達とつき合うこともおぼえねばなりません。そろそろ親離れが必要なのです。“ありったけおりこうです”という表現が大変おもしろいと思います。欲望制御の訓練、“おあずけの味”をよく味わせねばなりません。“のびのびとけじめ”の心身の訓練と社会人として基礎になる「しつけ」が重要です。子供の世界は、遊びの世界だと言いますが、六歳頃になると、ひとり遊びや家庭内とか家の近辺での遊びだけでない。いろんなところでいろんな友達と遊び、“小さい社会人”“小さいおとな”としての遊びが大切となります。

有名な「梁塵秘抄」にも歌われています。

遊びせんとや生れけむ

戯れせんとや生れけむ

遊ぶ子どもの声きけば

わが身さえこそ動うごかるれ

生まれてから六年。それは、人類発達の六万年にも当る変化の多いながい発達の歴史です。この時期、その発達段階に応じふさわしく豊かに過すことによって、思春期を正しく迎えることができるのです。

ところが、この頃の子供たちの思春期（中高生）はあまりに暗く、あまりに問題が多いことは誰でも知っていることです。非行・登校拒否・家庭内暴力・校内暴力・自殺……問題はつきないのです。これらのケースを実際に扱って痛感することは、

幼少時における生活体験の不足から来るバースナリティの未成熟ということです。ミルンの詩に見られるような、発達段階の成長がないのです。高校生や大学生になっても幼稚未成熟な「指示待ち人間」が年々ふえております。学生だけでない。社会人になった筈なのに、半人前以下のおとな、幼児性をぬけ出していない者が甚だ多いのです。結婚しても母子分離できず、新婚旅行先から朝に晩に母親に電話をかけて指示を仰ぐという。そのため新妻が不満をのらせ、新婚早々の若夫婦にゴタゴタが起る例が多い。

このようなことの最大の原因が、六歳位までの幼児の育て方の間違いにある。ミルンの詩にあるような「心身の発達」に即したたくましい成長の不足にあるように思われるのです。

（元東京家庭裁判所判事）

養護学校の日々

保育研究と保育実践

実験や客観的観察でなく、子どもの生活に参与することによる観察と体験を、保育の研究の素材とするようになってから、私は十数年をへた。いま、毎日、子どもの保育にたずさわるようになって、研究と実践との根本的相異および、その積極的相互関連性を考えている。

日日の保育の実践においては、子どもが保育者と共にあることによって、十分に生き、自己実現をすることが第一の課題である。保育者もまた、自分が子どもの自己

津 守 真

実現を励ます存在となることによって、自分自身も充実感がえられる。それは大人の一方的なものではなく、子どもを十分に生かすことができたことによる満足感である。すなわち、実践においては、子どもが自己実現をなし、同時に、保育者の自我が強められて、両者が共に人間的成長をすることがその成果である。

研究においては、ある資料から、何らかの結論をひき出すことが課題となる。研究者は、自分のつみ重ねた体験を、理解し、解釈し、説明しようとする。だが、実践においては、その場で現象が理解できなくともよい。た

だ、保育者がそこにいることによって、子どもが保育者を信頼し、保育者も子どもを信頼するというひとつの体験を直接に分ち合う。子ども自身の活動が生れるのは、その相互直接体験の中からであって、説明以前のことである。

直接体験は、時間がたった後には、想起され、反省される対象になる。そのときに、意味本質が次第にあらわれてきて、意識化されるにふさわしい状態になる。保育の実践は、長期的にわたって毎日積み重ねられるのが普通だから、その経過の中で、体験を反省する作業は必然的になされる。その作業を、意識的に、できるだけ思考の随性に流されないように、生きられたままの体験にもどしてこそその意味を問うときに、省察としての研究となる。

そのような省察においてえられた理解は、次に類似の事態に遭遇したときに、実践を助ける場合もあるし、またその妨げとなることもある。それが先入観となつて、その場で起っていることをそのままに見ることができな

くなるときには、ひとたび作り上げた理解・解釈・説明は、子どもと直接体験を共にすることを妨げる。実践は、子ども自身の問題の解決と、未来に向う可能性への挑戦とを主たる課題とするのであって、そのことから目をそらせるような、大人の側の便宜や常識と、保育者は戦わねばならない。そのことにおいて、保育者を子どもの世界に向け直す力となりうるならば、省察によって得られた理解は、実践に対して積極的意味をもつ。

最後を破損する行為

五才の男児Rと私とのつき合いは、時期によって深淺の差はあるが、もう二年近くつづいている。最近、Rは私を見ると職員室に一緒に来たがる。

職員室では、まず、Rはお菓子をおす。それから、紙に絵を数枚かいてから、先生たちの机の上の物をいじり、教材棚から何かをおろす。ときによって対象は異るが、私と写真をみたり、絵本をみたり、また、冷蔵庫をあけて何かをとり出し、二階の窓から庭を見たりして過

す。何度も戸のすきまから外をのぞいて、それから遊戯室や戸外にゆく。弁当をたべるとき、最後の部分を床にひっくりかえし、いつも足にはいている長靴で床にふみにじる。

これらのことに對する私の応答の仕方は、日を重ねるにつれて變化した。

最初は、私は當惑し、自分の中にある社會常識に従つて規則を加えながら、子どもにある程度の満足を与えるようにしていた。お菓子をさがしたときには、ひとつでやめさせた。そうすると、無茶苦茶に全部かかえて食べようとする。包裝紙を破いて後にすて、半分かじつて足で踏みつぶす。教材棚から新しい教材をとるときには、これはだいいじだから、ほしい物を云つたらとつてあげる。と云う。そうすると、全部ひきずりおろしてかきまぜる。こんな工合である。弁当の最後の部分を床にすてて踏みにじるときも、私は口で何か言いながら、直ちに拾つて床をふいた。するとすぐに同じことをくりかえした。しかし、それにもかかわらず、私にもたれかかり、



顔をよせ、親しさを示してきた。

こういう日日を重ねながら、この子どもの行為のあれこれを考えるうちに、たのしく過した活動でも、最後の部分を自分で破壊し、だめにするのが、この子どもの生活のテーマになっていることに気が付いた。えをかいたときも、最後を黒くぬりつぶす。その紙を水の中につけて破り、窓から外にすててしまう。そしてこの頃は、一緒にたのしんで食べた弁当を、最後を足で踏みつけてしまう。

考えてみると、この子どもの生活の中には、たのしんでやっていた行為の最後が、外部の力によってだめにされる体験が多かったであろうことが推測される。年令の近い弟が二人いて、Rが落着いて遊んでいるときに、その子たちがとびこんで、遊んでいた物をとってしまうことがしばしばある。弟たちがわるいわけではない。力の関係でそうなるってしまうのである。私が一緒にあそんでいたときも、弟たちの紙工作の方が私も面白くなって、Rを置き去りにして気が付かなかったこともある。この

子どもは、自分がやりはじめたことを、最後までたのしんでやり通した体験がきわめて少ないのではないだろうか。

私が最後をだめになっている場合もある。職員室で、子どもが机の上の物に手をふれると、それはだいいじだからと先走って言うのは私である。そのときには、私は、子どもが最後までやりとげることのたいせつさを忘れている。こうしたことが続いたあと、子どもがこの生活の中の受身の体験を、能動的な行為にして表出するのは当然ではないか。弁当の最後を、自分の足でふみにじり、だめにする行為は、生活の中で自分が受動的にされている行為を、能動的に表現していることにはかならない。

このことに気が付いてから、私がこの子どもと一緒にいることによって、最後までたのしんで活動を終るようになりたいとは思った。大人が大切と思う物に子どもが手をふれたときにも、私はすぐに反応することをやめた。むしろ私もそれを手にとってみると、一緒にそれをたのしむことができ、破壊的行為にまで至らないこと

が多い。子どもが関心を向けていることに、大人も関心を寄せることによって、ひとつの物が、子どもだけの物ではなく、私と共同の物になるのである。そのときに、子どもと私とが互いに理解し合う場がつくられたことになる。最初から破壊的行為を予想して心配しているときには、子どもと同じ場所においても、大人の心は子どもの関心から離れている。子どもがそうせずにはいられない心の屈託や悩みをまず察することをしないで、外的秩序を保つことのみが大人の頭を占めていたならば、子どもの問題の解釈にはならない。こう考えたとき、私は、Rが弁当をふみにじったときも、これをすぐに掃除することをせずに、少しでも子どもの心が安らぐようにと考えて行動するようにした。不思議なことに、数日後には、弁当を床にひっくりかえすことも、ほとんどなくなってしまった。

相互直接体験の中から

こうしたある日、Rは、庭の砂場で丸いクッキーのか

んに砂をいれて、職員室に持ってきた。そして、冷蔵庫の上部の冷凍室にそれをいれた。一瞬私はためらったが、この子どもとどこまでも関心を共にしようと思った。Rはじきに砂のかんを冷凍室からとり出して廊下にあけた。それから冷蔵庫より胡椒のびん、唐がらし、青のりのびんなどをとり出して、砂の上にふりかけた。私も一緒になって砂をかきまぜた。最後にはやっぱりだめだったという体験にならないように、その時をこの子どもと一緒に快く過せるようにと願った。わずかの時間だったけれども、薄暗い廊下で一緒に砂をかきまぜていたとき、静かな落着きと共に、私はこの子どもの心にふれたように思った。

このあと、Rは庭に出て走りまわり、声を立ててとびはね、ホースで水をまき、せんたくをして遊んだ。

後になって考えてみると、クッキーのかんに入れた砂は、この子にとっては、砂ではなくて、お菓子を焼く粉か、大好きなハンバーグのひき肉と同じだったのだろう。冷蔵庫からとり出した小さな瓶から調味料をふりか

けて、いつもやってみたいと思っていた台所の手仕事を、今日は思い切ってやれたのかもしれない。その行為の最中には、私はこのことを思い浮かべた。むしろ、最後まで早く子どもと時を過ごすことを考え、この時の子どもの体験を分かち合いたいと思っていただけである。しかし、この時のこの子どもの行為には、砂を小麦粉とひき肉とおきかえてみれば、一貫した秩序があるのを見てとることは容易である。子どもが考えてもいない事態を予想して恐れ、それに備えて防備する自分を正當化するのとは私ではないか。子どもの行為の正當さを私が信頼しなかったら、どうして、子どもは私の内にある秩序に耳を傾けてくれるだろうか。砂と一緒に手をいれて、胡椒と一緒にかきまぜていたとき、相互の信頼感がそこにあり、同じ体験が分かち合われたのだと思う。そのことが、子どもの自己活動を生み出し、また、私の見方をも変えた。

障害をもった子どもと交わっていると、自分でも極端

に思えるほどのことをせねばならぬことがある。それは、普通以上に心の悩みをもつ子どもの問題をほどいてゆくには、それだけのことが必要だからということもある。しかし、その多くのことは、一、二才の時期だったならば、あたりまえにやっていることである。年令も大きくなり、身体も大きくなっているので、活動の規模が大きくなり、目立つのである。だが、この時期を、大人と一緒に歩み、共に信頼しあえる時を積み重ねてゆかなかったならば、子どもの能動性は失われて無気力になるか、あるいは、自他ともに破壊することになるだろう。

(愛育養護学校)

* * *

S F 的読み解き

子どもという風景

第四回 アリストテレスとおばあちゃんたち

堀内 守

深く惟れば

一見あまり関係なさそうな物事をあえて結びつけてみることにしよう。そうすると、その隙間から私たちの想像力をふくらませる面白い風景が見えてきて、私たちの身や心を揺り動かしはじめる。

たとえば、こんなのはどうだろうか。

アリストテレスといえば、古代ギリシアの哲学者の名

前である。アリスとテレスといえば、デュエットでうたう歌手たちの名前に変わる。少々いたずらをして、「アリ、スト、テレス」（蟻スト、照れず）などという遊びも可能である。新聞の見出しのように。

アリストテレスは、師のプラトンと違って、自然や人間の生活について丹念に材料を集め、きちようめにメモをとり、コツコツと分類をしている。そしてそれをやや大仰な表現で記述した。重々しいが、内容はいささか

単調である。分類をきちんとやり過ぎると、物語性が乏しくなるものらしい。そんなことを思いながらアリストテレスの作品を読み進めていくと、その文章の裏側にわれわれが幼い頃つき合った「おばあちゃん」たちが浮かびあがってきた。

二千数百年も前のギリシアの哲学者の記していることと、二十世紀のある時期までの「おばあちゃん」たちの語っていたことが実によく似ているからである。特に「世間」に関する知恵がよく似ている。「世間」「世の中」「広い世間」「渡る世間」等、さまざまな文脈が絡み合っていた。利害がからめば「世間」のイメージは凄まじき相貌をとってあらわれる。「生き馬の目を抜く」とか「火事と喧嘩は江戸の花」とか、「憎まれ兒世にはばかる」とか、格言、諺、箴言が続々と紡ぎ出される。

反対に、利害が抜き去られたとき、「世間」はまことに大らかな、まるで夢の世界のようにふくらみはじめ、ふんわかした気分にさせてくれる。「渡る世間に鬼はなし」、「可愛い子には旅をさせろ」「旅は道連れ、世は情」

というようなぐあい。

われらが「おばあちゃん」たちが元気だった頃、井戸端や川端や、たまさかの茶呑み話の場で語っていたトビックスは、どこまでがホントで、どこまでが神話で、どこまでが創作で、どこまでが噂で、どこまでが伝聞だったのだろうか。まるで、次々とことが交わされ、笑いが生まれ、ざわめきが生まれ、そうかと思うと、急に声をひそめ、あたりを見まわし、ひそひそ話をする。かと思ふと、乱暴なことばで子どもたちを叱り、次の瞬間にははめている。ことばという異様な怪物が彼女たちをつき動かし、彼女たちをして語らしめていたのだろうか。

形而上学（メタフィシカ）

アリストテレスの著書の一つに『形而上学』と題する作品がある。「形而上学」とは遠い世界のことばのように思えましょう。だいたい、音がいかめしい。「ケイジジョオガク」というのだから。イミの方をこれだけでさぐるのはむずかしい。国語辞典を引いても、その説明は

まことにわかりにくい。哲学辞典では、もっとわかりにくくなる。お試しあれ。

でも、もともとはそんなにいかめしいイミはもっていなかった。いろいろな本にそのいわれが記されているから、以下の説明は余分なのだが、そのことを承知の上であえておつき合いをいただくと、ちょっと微笑をさそうようなエピソードがそこに浮びあがってくるのである。

アリストテレスは、自然について『自然学（フィシカ）』と題する本を書いた。いろいろな本を並べ、一つの大きなテーマが浮かびあがるようにしようと思ったものらしい。『メタフィシカ』は、『自然学』のあとで書かれ、あとに置かれた。「メタ」とは「あと」の意である。平たくいえば、こんなことになるのか。まず『自然学』を書いた。人間をとりまく世界、人間が飲んだり、食べたりすることもそこに含めた。しかし、人間は単に飲んだり、食べたりするだけでは満足しない動物である。それを超えた世界をつくり出している。

アリストテレスは、それを「超えた」ところを一巻に

まとめた。何という題をつけようか迷った。結局、うまいアイディアに恵まれず、「あーとーで」の歌よろしく、先に延ばした。「あーとーで」決めようと思ったのである。

われらが「おばあちゃん」たち

「そりゃ、そうだろうよ。名前をつけるのはなかなかむずかしいものだ。急いでつけたら、のちのち（メタ・メタ）困る。『急いては事を仕損ずる』というからな。『下手な考え、休むに似たり』さ。いい考えの出てこないときは、思い切って休み、先へ延ばしておくのがいいのさ。世の中って、そういうものだよ。」

「くわしいことは知らないが、まあ、こんなこともいえるな。『善は急げ』とも、『今日できることを明日に延ばすな』ともいうからね。いろいろな名前を舌先でころがして、どっちにしようか、こっちにしようか、ほおずきをころがすように、舌先三寸で転がしているうちに、ことばはしだいに角がとれて、丸い、ころころしたもの

に変わっていくものだ。」

「あとか。『うしろ』『背』、時の『後』、いろいろふくらんでいくなあ。事の後先を考えるのは大事なことだよ。順序をまちがえたら押しても引いてもどうにもならないことが出てくる。因果はつねにめぐりくるものよ。原因はいつも結果より先にある。結果はいつも原因よりもあと（メタ）にある。前世の因果がこの世において姿をあらわす。因果はみーんなお天道さまとホトケさまの手のうちにある。」

名前の記号学

「おばあちゃん」たちの言い分はアリストテレスが重々しく記していることに接近する。

彼女らの名前。それにも一定の徴しるしがあり、あるグループにまとめあげることでもできそうである。アリストテレスならば、喜び勇んでメモをとることだろう。

ある年代の「おばあちゃん」たちは、ほとんどがひらがなの名前である。呼ぶときにはかならずその名の上に

「お」がついた。曰く、おりん、おこと、おしま、おりく、おむら、おきく、おこん、おいと、おすて、おいち、おもと、おみず、おたつ、おとら、おくま、おたき……。まるで、子丑寅卯……の十干十二支のまんだらのようでもあり、花園の花のオンパレードのようでもあり、音の組み合わせを競うコンクールのようでもある。

ある年代から、そのまんだら模様が変わり出す。「枝」

「江」「代」などがあとにくつつく。「メタ名」？

「きく枝」「きく江」「きく代」。「菊枝」「菊江」「菊代」。

こんなぐあいに華やいてくる。知覚も拡がり、「薫」と

か「香」なども動員されてくる。「紫」「みどり」「美登

理」「ミドリ」。萬葉仮名が再発見されて、「奈津江」「香

保留」なども登場。これと並行して、「貞」「福」「幸」

「和」「洋」「敬」「美」「久」という「メタ・メタ名」が

ファッションの世界を切り拓く。そして、ついに「……

子」が許される。どつと花開く「子」の世界。それは

「メタ・メタ・メタ名」とでもいうべきだろう。

アリストテレスなら、こういうオンパレード、こうい

うファッションに驚嘆し、十千十二支、陰陽五行の与える深みを大いなる宇宙誌（コスモロジー）としてまとめあげたに違いない。そして、もし彼が今日の日本にやってきたなら――

大河ドラマや連続テレビ小説の主人公たちの名がそのまま番組の名になっていて、「おはなはん」だの、「おしん」だのが人気を得ていることに感嘆し、歌の世界にも「お富さん」だの、「与作」だの、「山口さんちのツトム君」だの、「およげ、たいやきくん」などが一世を風靡したのを知って、思わずひざを打ったことであるう。

美しい記号の意味作用を味わおう。

「さくら」「佐久良」「桜」「ウメ」「うめ」「梅」「ゆり」「百合」「由理」。

「春」「夏」「秋」「冬」。

光の系列――ひかり、光枝、光江、光代、光子。輝代、輝子、照江、照子、月子、明子、晴子、晴代。つまり、「光」「輝」「照」「明」等はある地上から浮上する。しか

し、「闇」「暗」「滅」「暗」などは遠く押しやられる。

数の系列。百、千、萬。「百枝」「千代」「千代子」等。「一枝」「三子」「十三子」。

徳の系列。貞、淑、良、徳、道。「貞子」「淑子」「良子」「徳子」「道子」など。

あとは、今様アリストテレスにまかせることにしよう。われらがおばあちゃんたちの中には、これらの本名のほかに、驚くべき多彩な名をもっている人もいた。江戸時代までの名残りである。「通称」があった。「幼名」があった。「実名」を用いずに「忌み名」を用いている人もいた。「奉公名」をもつ人もおり、「出世名」をもつ人もいた。

ある見方によれば、これらは大変煩瑣な慣習のように見えよう。しかし、自分が数個の名前を名乗り、他の人びともそれをちゃんと器用に使い分けていた時代がつい先頃まで続いていたことを見落してはならないだろう。

命名の秘儀

落語の「寿限無」は、おめでたい名前を全部つけてしまい、その長たらしいのに迷惑するおかしさをテーマとしている。実際にはそんなことはないが、その「愚かさ」を笑いとばせないのは、私たちが一人一名という原則を当然と見なしているからである。一人の人間の名前が一つであるべきだ、という原則は近代的な行政の整備とともににはじまった。改名は禁止された。だから「寿限無」を聴いているうちに、主人公の心根があるベースをもって迫ってくるのである。

よい名を自分の子どもにつけてやりたい。そういう気持はだれにもある。だが、いったい「よい名前」とはどんな名前なのだろうか。

それにも歴史はあるのだ。そしてもっと面白いのが、姓。アリストテレスが日本人の姓を分類したとしたら、どんな仕方を試みたことだろうか。占いによると、字画が物をいうらしい。もともと農耕社会を母胎としているような姓が多いのが日本の特徴のようである。イメージのあふれる姓もある。地形、地勢と関係のありそうな姓



もある。植物の名をそのまま取って姓にしたようなものもある。しかし、これらの多くは、漢字の組み合わせによってほとんど広がついていただろう。

さまざまな期待やねがいをこめてつけた名前が、たくさん並ぶと、秘儀の要素は薄くなり、ついには漢字の順列と組み合わせという数字の手法に近づいたり、漢語の組み合わせの妙なる遊びに近づいていく。

秘儀がなぜ遊びに近づくのか、こんどは目を空に向けてみる必要がある。夏の空を例にとってみよう。

星座の名前

夏の空の星。一つ一つを眺めるよりも、乳を流したような天の川（英語では「ミルキィ・ウェイ（乳の道）」ともいう）、ひしゃくが折れ曲ったような北斗七星、そのちやうど反対側に見えるカシオペア座などを見えることにしよう。昔の人びとは、空の星を眺め、そこに何らかのカタチを見出した。星の群は何か別のもののように見えた。

星座の名はギリシア人の（というよりも、ギリシア神話の、というべきだろうが）独演場のように思える。アンドロメダ、オリオン、アンタレス……。ヘビ座、琴座、冠座……。

今日の私たちは、北の空に輝く七つの星を見て、「ひしゃく」の形を思い出す。北斗七星は「ひしゃく」であるかのように見えるのである。しかし、古代のギリシア人たちは、そこに「大熊」を見出した。オリオン座と命名されている星座を見て、そこにオリオンという人物の動きを見出すには私たちはかなり無理をして、いろいろ補ってみなければならない。しかし、古代の人びとは、オリオン座にオリオンという主人公の上演を見たのである。

あるものを見る。それをそれそのものと見ずに、別の何かであるかのように思う。別の何かのように見えず。この力こそ秘儀と遊びの誕生する場であった。神話と芸術の誕生する場であった。

空の雲、それはいろいろな形に変わる。「入道雲」「い

わし雲」のほか、子どもたちは一つの形からさまざまなものを連想する。そして、それを口に出して言いたくなる。綿のよう、アイスクリームのよう、スパーマンのよう、プロレスラーのよう。それも命名の秘儀なのである。同時に遊びでもある。物語の発端でもあり、詩の発端でもある。

アリストテレスの語らなかつたこと

百科全書よろしく、多方面に目配りをしたアリストテレスも、わが「おばあちゃん」たちのしたたかな生き方については言及していない。時代が違うから、といったのでは答えにはならないのである。

わが「おばあちゃん」たちは、気の合った仲間と遠慮なく語る時にはまことに明けっ広げて語つたものだ。そこに子どもがいようが、おかまいなしである。浜辺で、街角で、洗濯場で、井戸端で——要するに、あらゆる場で語つたものらしい。

「この草は胃の薬になる。あの草は赤い実をつけるが、

あれは毒である。」

「あの家の娘もう年頃だ。どこかのお嫁に世話をしなけりや。」

こんな会話もあつた。しかし、時のたつのを忘れ、時には道端に腰をおろして延々とおしゃべりに及ぶこともあつたようである。他人の空然の不幸に同情し、涙を流す。次の瞬間にはどこかの家で子どもが生まれた話に移り、呵々大笑する。

「あたしだって、まだ生めるぞ」などと言って気張つてみたり。

道徳律

「おばあちゃん」たちの道徳律は、文字に表現するのがむずかしかった。筋が一貫しているようでもあり、例外がたくさんあつたりすることもあり、場当りのようにも見え、また場面ごとにそれは適つた行動を器用に使い分けているようにも見えた。気前のいいときもあり、ケチであることもあつた。

とりなし、仲裁、悪口、駆け引き、根まわし。横柄さと謙虚さが共存し、強欲なところと氣前のいいところが共存し、おそるべき能弁さと口下手とが共存していた。

「人間は本質的に政治的動物（ゾーン・ポリティコン）である」とは、アリストテレスの有名なことばである。

この場合の「政治的」にはいろいろな脈絡が重なっている。身内のなかでも、親子・夫婦・血族・イエ・親戚等のしがらみが重なっている。向う三軒両隣りとのつき合いのルールもある。町内・業界・取引先ともなれば、人間交際の基準はだんだんと義理に近くなり、固苦しく、水くさくなるだろう。これらの向うには赤の他人という厖大な数の人びとがいる。甘えは許されず、おつき合いするには気疲れがする。「気が許せぬ」のである。

「おばあちゃん」たちは、孫の養育には直接責任をもっている。とはいえない。したがって、どちらかといえば、幼い孫たちとのあいだでくつろぎを感じ、安らぎを感じる。自分が当事者となって何人もの子どもを夢中になって育ててきた時は遠く去ったように思え、目の前の孫を見ても、

自分がどうやって子どもたちを育てたか、まるで夢のようにしかおぼえていない。

「おばあちゃん」たちは、初めて幼児と接するようつもりで孫と対面する。そして、ゆっくりゆっくりと、自分の子を育てた時の経験を想起する。単に想起するだけではない。それらが鮮明に湧きあがるにつれて、彼女らはそれを口にしたくてたまらなくなる。それは、事実のレポートというよりも、語ることであの経験が形をだんだん鮮明にしはじめるのを楽しんでいるのに近いのである。

「昔々、あるところにあったそうな……」「あれはおばあちゃんがお嫁に來た年のことだった。三國一のお嫁さん、とほめられたものだった……」

「おばあちゃん」は目をつむる。過去のことを語りながら、あきらかにそのイメージが現在にあることに自分では没入しているのである。

「あれからもう二昔も、三昔もたってしまった。いろいろなことがあったけど、みんな達者で生きて來れたから

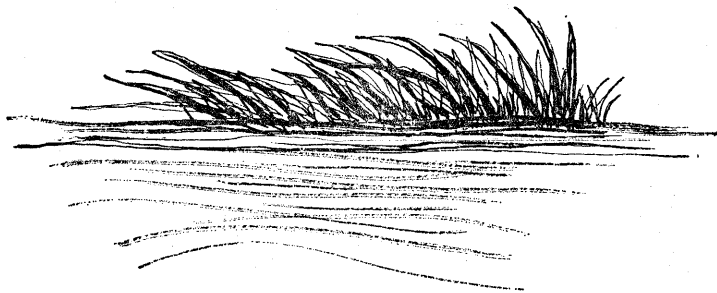
よかったと思っているよ」(十分な間)

そこからアリストテレスばりの話がはじまるのである。アリストテレスが人間を「政治的動物」と定義したのは有名だが、それと並び、彼はまた別の定義もしている。「ロゴスをもった動物」というのがそれである。

ところが面倒なのはこの場合の「ロゴス」である。それはふつう「理性」などと訳されるが、その周縁にはさまざまなイミが絡みついている。「論理」「ことば」というようなのがその一例である。

ロゴスというのはどうもそもそのところから過剰を含みもっているらしい。つまり、単なる生存(食べ、寝るというような)を超えるエネルギーである。よくもまああんなに書きまくったものだ——アリストテレスの作品を見てそう思う。わが「おばあちゃん」たちを思い出したに、よくもまああんなにおしゃべりしたものだ、と思わせられる。条件さえ整えば、わが「おばあちゃん」たちも、アリストテレス全集に匹敵する著作集を書けたかもしれない。でも、やっぱり書かなかったろうな

あ。「めっそももない」とか「こわい、こわい」と断わるだろうか。
(名古屋大学)



近代短歌に現われた子ども（二十五）

大塚 雅彦



（46） 死刑囚の歌

死刑については最近その廃止論などをめぐって色々と論が多い。夙に死刑廃止論者として知られた故正木亮博士の著『死刑』（昭39・12）には「消えゆく最後の野蠻」という副題がついている程である。西側先進国で死刑を存続させている国は次第に少数になっているが、わが国では未だ廃止は時期尚早とする世論が強いようである。わが国で戦後、刑を執行された死刑囚は六百人近いが、最近、死刑確定者の再審開始が相次ぎ、免田事件・財田川事件・松山事件などがあらためて無罪となり、誤判のおそろしさを国民に強く認識させるに至っており、死刑制度の問題は文明的な考察を背景にして一層人々の関心を惹き続けるのである

う。

死刑を論じたり死刑囚を紹介したりする書物や、死刑囚自身の手記等も、最近では公刊されるものが少なくない。例えば、精神医学者であり作家でもある加賀乙彦の『死刑囚の記録』（昭55・1）は、著者が直接に会い、話をし、観察し、交際した何人かの死刑囚について述べているが、これは彼が『宣告』（昭54・2）に於て小説のかたちで死刑囚を描いたのと異り、そのような仮構のかたちでなく「死刑囚がどのような生活を送っているか」という事実を報告しておく義務をおぼえ」（あとがき）で刊行したものである。また、高橋良雄の『鉄窓の花びら——死刑囚へのレクイエム』（昭58・3）は、拘留所長や矯正管区長などもやり刑務官生活の長かった著者が、死刑囚のノートや遺書をもとに何人かの死刑囚の実態を描いており、感動的である。処刑される者への永劫の別れを意味する臨時の「特別集会」や「お別れ俳句会」や「茶会」の模様の叙述などに私は強い関心をそそられたし、茶会に出た女性死刑囚（強盗殺人・放火犯）

の「食台に汗の指もて子の名書く」の俳句などにも心惹かれる。小鳥を愛して飼い、達筆で俳句や短歌を書きつける禿頭の老人死刑囚矢島新吾（強盗殺人犯）の様子なども生き活きと描かれている。

死刑囚の手記では、例えば正木亮・吉益脩夫編『正田昭——黙想ノート』（昭42・7）などがよく知られている。これは昭和二十八年夏、いわゆる「メッカ事件」を起した正田の思索ノートを紹介したものである。正田は慶大在学中から金銭濫費癖がつき、卒業後会社員となったが、他人から預かった株券を返還せず金融業者Hに依頼して売却し、売得金を遊興などに費消し、返済に困り、共犯者たちと共に東京・新橋のバー「メッカ」に於いて右のHを殺害する強盗殺人事件を起したのである。彼は犯行後も長い間罪の意識を欠き、真の悔悟が見られなかったが、その後、カトリックのカンドウ神父に出遭い、はじめて人間的に目ざめ、死刑を宣告された極限状態において、毎日読書と思索に専念し、神を求めて精進する間に書いたのが、この「黙想ノート」である。元来

すぐれた文才を有し、「群像」の新人賞に応募して同誌に作品が掲載されたこともあるが、明るくユーモアに富む性格で、また、「全生園」のハンセン氏病患者者に対して惜しみなく全力を尽して励ましの手紙を書き続けたりして、人々の心に深く印象をのこして絞首台にのぼっていった。加賀乙彦の前掲書『死刑囚の記録』の第六章にも正田のことは紹介されているが、彼の「ノート」は房内で書かれた死刑囚のすぐれた省察として、死刑囚の心理をよく示しているのである。

すぐれた短歌や俳句を遺した死刑囚もある。例えば『小鳥と手錠』『いのち重たき』の二冊の歌集をのこして刑死した大堀昭平のことは、かなりよく知られている。また、加賀乙彦の『死刑囚の記録』にも「横須賀線爆破事件」の犯人である若松善紀のことが書かれている。これは昭和四十三年六月、大船駅付近の踏切で横須賀線電車の網棚の荷物が爆発し、乗客一名が死亡、十数名が負傷した事件であり、犯人として二十五才の大工の若松が逮捕されたが、犯行の動機は、結婚する約束で同棲して

いた女性が他の男性と恋仲となったのを恨み、鬱憤を晴らそうとしたのである。死刑を宣告された若松は東京拘留所内でプロテスタントの牧師の教誨を受け次第に信仰に心を寄せ、またしきりに短歌を作った。加賀は前掲『宣告』（長篇小説）の中にも若松をモデルにした人物を登場させているし、また短篇小説を集めた『犯罪』の中でも「ある歌人の遺書」という一篇で、彼の処刑前後の模様や処刑直前の最後の手紙を紹介（高松育夫というペンネームになっている）している。若松は歌誌「潮音」（太田青丘主宰）に純多摩良樹のペンネームで短歌の投稿を続けていたもので、太田青丘はその著『太田水穂と潮音の流れ』（昭54）の中で若松の歌を、すぐれた作品として紹介している。但し、若松は独身であったから、子どもの歌はあまりないようである。

俳句では大阪で俳誌「大樹」を主宰し、大阪拘留所で「ひこばえ」と名づけた句会により死刑囚の俳句指導をし続けた北山河と、その娘北さよりの芸編に成る『処刑前夜』（昭35・2）がある。「死刑囚のうたえる」とい

う副題があるように「春浅し背すじの冷ゆる 鍵の音」
「春風に光る手錠をかくすなし」等、すぐれた死刑囚の
句を多く紹介しているが、子どもを素材にした彼等の作
品にも次のような秀作がある。

子へ賀状 筆太く死を 偽りて

子の手紙 蠅といっしょに 読みました

しみじみと 子を思う掌の 桜んぼ

さて私は今、死刑囚歌人の二つの単独歌集をここにと
りあげよう。

① 島秋人『遺愛集』

島秋人^{あきと}は本名中村覚、昭和九年生れで、満州で育つた。引揚後も母の病死、自分自身の病弱、周囲からの疎外等があったようで、転落生活が始まり、少年院にも入れられたが、昭和三十四年の雨の夜、飢えに堪えかねて

農家に押し入り二千元を奪い、争って家人を殺し、死刑囚となった。そして四十二年十一月、三十三才を一期として処刑されたのである。

彼は中学生の頃、図工の教師吉田教諭にたった一度だけ褒められたことが忘れられず、獄中から手紙を出した。それが機縁で、吉田氏の夫人^{おきよ}絢子から短歌の手ほどきを受け、忽ちに才能が開花し、「歌詠みて悟り得し今の愛しさは死刑あらねば知らざりし幸」と心境をうたう程、短歌にうち込むようになった。昭和三十八年には窪田空穂が選者をしていた毎日新聞の毎日歌壇賞を受けるに至った。これより先、アメリカの週刊誌「タイム」にも「彼の歌は、オスカー・ワイルドの叙事詩^{ナラティブ}を追想させる」と紹介されたりしている。その三十七年には死刑確定したのであるが、その年に受洗もしている。三田高校に在学していた前坂和子（後に教師となる）から激励を受けて文通したり、信仰を持つ女性で、彼の遺体献納のために必要なので養母となってもらった千葉てる子や、盲目重病の人で手紙で彼と愛を誓いあった鈴木和子等、

彼を支えてくれた人が何人か居たようである、そして処刑前夜「この澄めるころ在るとは識らず来て刑死の明日に迫る夜温し」の透徹した心境の絶詠をのこして、絞首台に消えたのである。彼の「獄中生活と死」は多くの人々に深い感銘を与えたらしく、前掲高橋良雄『鉄窓の花びら』には十四頁にわたって「幽囚の歌人」として彼のことが述べられており、また、佐藤幸治（京大教授・心理学）著『死と生の記録』（昭43・3）にも、彼の短歌を多く引用しつつ、その「澄み渡った高い心境」に至った経過が語られている。

『遺愛集』は昭和四十二年、つまり処刑の年の十二月に刊行されている。窪田空穂の序文、秋人自身の「あとがき」、前述の前坂和子の「鳥秋人さんの想い出」という文、窪田章一郎（空穂令息）の「後記」等がある。歌集の題名は前坂和子が高校生の頃つけてくれたものを、前からきめていて名づけたものという。集中には多くの秀作があるが、ここではむしろ、子どもをうたったものを若干あげよう。むろん、彼は千葉てる子に宛てた手紙の

中に書きつけた句「童貞に終るひとりに秋の風」の如く、結婚生活を経験しなかったから、自分の子ではない。

①眼をつむり にはかめくらとなりて聴く

ガラスを知らぬ盲ひし児の詩

②悔いに冴え 眠りそびれしわれの眼に

いたはる如く児童図画あり

③同囚の祈りむなしく幼児持つ

友の死刑は確定となる

④かなあみを叩き呼ぶ児に泣きながら

父となりゐき若き死刑囚

⑤美しき靴のみ選りてかくすくせ

もてる園児は母亡き児なり

⑥カリエスの孤児の少女のあみくれし
レースの花器しき許可にならざり

⑦独房もさかさに見ゆる児童画も
めづらしかりき寝ころびてゐて

⑧愛に飢うる小さき胸に菓子袋
ひとつつただく孤児の一群

⑨双手振り 歩み初めし児を獄窓の
かなあみの目のひとつにみたり

⑩酒のみの父持ち貧しき姉弟の
誤字多き手紙を獄に愛しむ

⑪屋根少し濡れて夕づくひとときを
児のこゑ高く透りて聴ゆ

⑫獄外に子供神輿の行くらしく
笛と太鼓と聴えて楽し

①から④迄は昭和三十六年作で、この歌集は三十五年作から始まっているから、初期のものである。盲目の児の詩や児童画などに惹かれるのは、やはり肉親の愛に恵まれず育った薄倅の彼の境涯がそうさせるのであろう。

幼児をもつ若き死刑囚仲間を詠むのも、いかにも彼らしい。④の「父となりぬき」というのは、「父らしい様子をあらわしていた」という意味であろうか？この歌の次に、島秋人自身が殺害した被害者の児に託びる作品も続いている。⑤はその前に「四歳のじゃんいちと云ふ児を知りぬ母亡き故に笑はぬとあり」という歌があり、また後の方に「容疑者とつめたき目もて視なさるる母亡き幼児を獄に知りたり」というのもあるので、事情がわかる。⑥は獄内のきびしさを想わせる作品であり、この歌の「カリエスの孤児の少女」や⑧の「孤児の一群」や⑨の「歩み初めし児」や⑩の飲酒家の父を持つ「貧しき姉

弟」等をとらえて素材としているのも、彼の生い立ちから来る共感であると共に、自他のいのちをいとおしむ心情が彼の裡に深くなっているのを、推察できる。⑪⑫は昭和四十二年、つまり刑死した年の作品であるから、もう死の直前の心境といえる。近づく死を待ちながら、獄中の子どもの高く透る声にじっと耳を傾けたり、子どもみこしの賑やかな状景を想像して楽しんでゐる。驚くべき純粹な到達した高い境地であり、読者のわれわれがむしろ死刑囚の彼から深く教えられる思いがするのではなからうか。

⑩ 草川たかし『処刑待つ部屋』

この歌集は昭和四十五年一月に「新日本歌人協会」から発行された。同協会の幹部の渡辺順三、赤木健介両名の序文があり、著者自身の「あとがき」と、協会の機関誌「新日本歌人」で選歌を担当している森川平八の「解決にかえて」という文とがある。この歌集を私が持っているのは実は、この森川氏が直接に送って下さったのである。これらの人達の文章や草川の歌を読んでみると、

草川たかしは本名でなく筆名であること、昭和十年に東京の多摩川ベリの中農の家の生れであること、この歌集発行当時三十四才の死刑囚であること、東京拘留所にもう七年も在監していること、家には老いた父母と、妻と、幼児が居ること、赤木から歌の添削を受けたのが機縁で、その勧めで「新日本歌人」に参加し、もう四年くらいになるらしいこと、獄中で浄土真宗を帰依していること等々がわかる。但し殺人犯というだけで、犯行内容の詳しいことはわからない。渡辺は、島秋人や大堀昭平の歌集などに比しても「それらに伍して劣らないと思っている」と述べている。子どもが出てくる歌を若干抄出してみよう。

①父親の記憶もたざるアルバムの
わが子は無心に砂遊びする

②人律に背き掛けられている手錠
吾子の瞳にうつることなかれ

③法律に背き死を待つ身となりて

ひそかに吾子に絵本を送る

④高塀を隔ててはむ子どもらの

声する方へ眼は向けて待つ

⑤獄の夜に渦なして顛つこれの世に

ただひとりなる吾子の面影

⑥愛しさのつりくるなべ狂おしく

個室に吾子のアルバムひらく

⑦虚しかる愛かと思う許されて

絵本を贈いぬ子に送るため

①と⑥はアルバムに撮っているわが子をうたっている。子と思うとき⑥のように心狂うばかり恋しいのだが、また「処刑台に処理さるべきわがいのちひたにし

ずけし吾子の顛つとき」と、子どもを想いやって心静かにしている折もあるようだ。③⑦のように、子どもにひそかに絵本を買って送ることもあるが、それもこんな土壇場になっての行為であって「虚しかる愛」と自嘲するのだ。②のように手錠をかけられている自分の姿を子に見せたくない、という自責の念が起る。④の如く獄の塀の外から聞こえる子どもらの声に心耳を澄ませて待つ姿は、島秋人作品にもあった。「遊ぶ子どもの声きけば、わが身さへこそゆるがなれ」という有名な『梁塵秘抄』のうたは、無心に遊ぶ子どもたちの声をきき、罪業深き遊女がおのが身を悔いているのだ、という一説があるのも、私には肯けるように思われる。殺人という大罪をおかした死刑囚が、わが子や他人の子を見たり、想いやったりしていのちの深さを自覚するのは、子どもの姿が人間の原点を示すものであるからであろう。

(お茶の水女子大学)

子どもたちのこと

大橋利恵子



E子のセンセイはM子

E子は幼稚園に入るまで、昼間は祖母と二人で家の中で静かに暮しており、赤ちゃんの時からじっとしている方だった。公園に行くことはあっても危ない遊びや鉄棒

などめったにやることはなく、砂いじりのような遊びが多かった。肺炎になったこともあって、少々かぜを引いてもすぐ厚着になるので、なかなか丈夫になってこない。いわゆる過保護である。もとの性格に環境が作用して、E子はかなりのこわがりになってきた。まず他

人がこわい、ふつう3才ぐらいの子どもは大人をこわがっても自分と同じぐらいの子どもにはいつのまにか近づいていくものだが、E子はその友だちもこわい。それから、からだを動かすこともあまり好きではなく、すべり台、ジャングルジムなどはこわくてできない。プールも浮き袋をもってなら楽しく入れるが、自分だけで泳ぐ練習となるとこわいのである。

そんなE子だから、園生活に慣れるのは大変であった。入園当初はだいたい長い間泣いていた。どうやら泣かずに登園してくるようにはなったが、初めてのことは何でもこわいからやろうとしない。汚れて遊ぶようなことはきらいだし、自分からはなかなかしゃべれない。例えばトイレだって、一人で行くことがなかなかできない。

先生にトイレに行きたいと言えるぐらいなら苦労はしないのだが、結局せっぱつまってその場で……ということも何回もあった。(その時のE子の気持を思うと心痛む思いである。)

それでも徐々に、E子はE子なりの努力をして園生活

に慣れ、みんなの活動をじっと見ていることが多くなった。家に帰るとその遊びをそっくり再現して一人で遊ぶのだそうである。そのE子が、友だちの遊びの中に参加していきえるようになったのは、M子の手助けがあったからである。

M子はやはり内気なおとなしい子である。でもM子はじっとはしていない。いつも自分で遊びを見つけたたり、考えたりして行動できる。その遊びに活発な子たちが参加してくればそれなりに一緒に遊ぶし、また自分からも活発な子たちの遊びがおもしろそうなら参加していく。何よりうれしいことは、M子はひとりではつんとしているような子にちゃんと声をかけ、一緒に遊んだり、グループの中に入れるよう橋渡しの役をしたりしてくれることである。E子の他にも、K子、O子、Y子などがM子に助けられて遊びに参加してきている、かといってM子は自分の意見を押しついたり、いばったりはしない。そしてまた、しっかりしているのにと教師の方が残念に思うほど表面に出て発言したり、リードしていったりとい

う行動はとらない。母親が「内気すぎてだめなんです。」
と言うぐらいである。

E子が朝、提出すべき手紙を持ってきて、それをどう
したらいいかわからないで手に持って立っていると、M
子は「ここにおくの」と手を引いてつれていく。また、
帰りの身じたくをし、すわって待つ時も、立ったままでい
るE子の手を引き「E子ちゃん私は私にしかなくてないか
ら二人一緒にすわらせて」と二人分の空席を確保し共に
すわる。実に適切に援助してあげている。遊びにももち
ろん手を引いていく。かといってM子が犠牲になって遊
んでいないわけではない。また、E子のいやがることを
無理にさせようもしない。素晴らしいことにごく自然に
M子はE子を援助してきてくれた。始めは手を引かれて
いたE子も段々自分からM子の後をついていくようにな
った。そしてさらに、遊びに入ってしまったE子以外の
子とも遊べるようになった。するとM子は自然にE子の
世話をやかなくなった。現在E子はまだまだ自己主張
はしないけれど、M子が居なくても誰かと遊べるように

なってきた。M子のE子に対する援助の適切さ、やさし
さを思う時、教師のあるべき姿を知らされたようで、己
の未熟を恥じるばかりである。
(岐阜北幼稚園)



幼稚園と男性教師

由井正人

① はじめに

小学館発行の「幼児と保育」の一、二月号に男性保育者について書かれていた。たまたま「幼児の教育」に男性教師について書くことになっていたので、興味深く読ませていただいた。

それによると、初めて男性保育者が誕生したのが、昭和四十三年であったという。同じ頃（四十二年）私も幼稚園教師として勤めはじめた。

長野県では、当時としては幼稚園の男性教師はめずらしいものであったようです。ようですと書いたのは、私

自身学校に勤めていたので、子どもと共に過すのは当たり前であり、特に幼稚園だからと言ってどうこう感じなかったからです。それ以後、本園ではずっと男性教師になっています。以下、本園の様子を紹介しながら、男性教師についてふれてみることにする。

② 本園と男性教師

本園には、在職年数に差はありますが、今までに五十名の教師が子どもたちの指導に当たっています。その中で二十二名が女性ですが、五名を除き全て非常勤講師と呼ばれている職員である。この五名も新卒で採用さ

れたのであり、男性教師のように県内の小中学校から転任してきたのではない。即ち附属幼稚園の男性教師は公立学校の教員になったのであり、ここが他県の附属幼稚園と違う、本県の教員人事の特殊性があると思う。

③ 附属と教員人事

前述のように、男性教師は県内の小中学校で数年から十数年経験して附属へ転任してきます。したがって公立学校の教職員であるが、書類上附属にいる間だけ文部教官となり、三年―四年勤めてまた市町村の小中学校へもどるのです。

県内十数郡市から推せんされた中から一名―二名しか本園には来れませんので、各郡市の推せんも男性が中心になっていることが、男性教師が多い原因のひとつであると思います。

さらに、教育学部の学生が、毎年六月中旬から八月まで、夏休みをはさんで六週間の教育実習を行います。実習期間中は、朝七時から夕方七時三十分まで指導をし

ます。七時半に学生を帰し、その後職員会、研究会、明日の準備等にかかりますので、帰宅が十一時、十二時になるのは普通です。

そんな様子を先生方はよく知っていますので、勢い男の先生の推せんが多くなってしまうのでしょう。

また、附属の使命のひとつに、実践研究と保育の公開があります。子どもたちの動きを追い、それを分析するのに相当な時間がかかります。ある時は、ひとつの動きに二時間もかけて話し合うこともあります。そんな訳で、研究会も遅くなるのが実状です。家庭を考えると、推せんはどうしても男の先生になってしまうように思われます。

したがって、長くいても長くとも無理ですし、附属でつけた力を郡市にもどって発揮してもらいたいのです。こんな訳で、長くても四年しか在職しませんから、幼稚園経験のある人が、どうしても少なくなってしまう。そこは、研究の継続、引きつぎなどによりカバーしています。

五十八年度は、左のような学級編成でした。

学 級	担 任	副 任
つくし組	塩 沢 崇	○二木淑江
たんぼぼ組	○宮 入 靖	○鈴木香奈
すみれ組	○小林賢一	
う め 組	萩 原 啓 治	○奥谷季世子
さくら組	天 田 藤 雄	

年度末にこの内五名の職員が移動しました。(○印)小林先生は出身地の小学校の理科専科に、宮入先生は、市内の中学校へ、副任の三人の先生方は結婚で退職されました。

④ 学級編成 (五十九年四月)

こうして、五十九年度は、県内の小学校から両市川先生と三人の講師の先生を迎えてスタートしました。

学 級		男子	女子	計	担 任	副 任
三歳児(つくし)		10	10	20	天田藤雄	一志理恵
四歳児(たんぼぼ)		16	18	34	市川俊一	浅井久美子
(すみれ)		17	18	35	塩沢 崇	
五歳児(う め)		16	19	35	市川伸人	滝沢佳子
(さくら)		18	18	36	萩原啓治	

担任は全て男性教師ですが、副任として女の先生がどのクラスにもかわれるようにしています。即ち子どもたちは、お父さん先生とお母さん先生にみてもらえるというわけです。

副任は、以前は各クラスに一名おり、いわゆる複数担任であつたのですが、国の財政上の理由から現在のようになり三名になってしまいました。内一名は園独自の費用でお願いしています。副任は、ふたつのクラスをもってありますが、保育材(単広とか主題といわれるもの)の切れ目や長期休みなどをひとつの節として交代しています。

⑤ お父さん先生

子どもたちは、男性教師をどう感じたのでしょうか。

たまたま本園の一期生、浅井久美子先生が勤めておりますので、語ってもらいました。

「私は、五歳児より附属幼稚園に転入し、大きく変わったことの一つに、今迄の園では担任の先生が女の先生であつたのが、男の先生と女の先生二人になったということです。女の先生に対しては、それまでと変わりなく「優しいな」という印象を持っていた様に思いますが、そこで私に大きく衝撃的な存在となったのは、男の先生でした。はじめは、「あれ、わたしのおとうさんとはちがう、こわそうだな」という気持から、優しくいつもニコニコして私たち子どもをそっと包んでいてくださったその先生にも、何かやっぱり近づき難いものがあつた様に思います。しかし一緒にあそぶ中で、そんな不安もすぐに解消していきました。

そんな中、私は一つの壁にぶつかりました。それは、

今見るとどうってことのない土手なのですが、そこから降りることの出来ない私を発見したのです。先生のあとをついて他のお友達は、どんどん坂を駆け降りていきます。一人取り残こされ、戸惑う私。ちょうどおべんとうの音楽が鳴りはじめ、焦りと不安が更に大きく私のしにかかってきて、すくんでいた足が、ますます前へ進まなくなつてしまったのです。坂の下では、私の名前を呼ぶお友達。お昼の音楽は大きくなるばかり。一步降りようとして二歩下がりそんなことを繰り返していました。

男の先生は、お友達に囲まれながらいつもと変わらぬ優しい笑顔で坂の下で私をじっと見ていて下さり、一言「頑張れ」とおっしゃったきりでした。笑顔は変わらなくともその眼差しには、厳しさと私に寄り添って一緒に坂を降りてくださろうとした優しさがあつた様に記憶しています。そんな厳しさと優しさに支えられ、勇気を与えられ、やっとの思いで坂の下へ駆け降りることができたのです。直接手を差しのべずに長い間待っていて下さったこと、その父の様な寛大さが、私に勇気をそして

優しさの中の厳しさを教えて下さったように思います。坂を見る度、子どもたちと駆け降りながら、感謝と共に、あの頃を思い出すのです。」

⑥ ダイナミックな男性教師

本園の男性教師の一番の利点は、前述したように全て小学校教師の経験を積んでいることである。即ち、小学校では何年生がどんな内容を扱っているか、実際に指導してきているのでよくわかっているということです。

したがって、幼稚園で今やっている子どもたちの遊びや活動が、やがて小学校のどの教科にどんな領域や内容として結びつき、関連していくのか、そして幼稚園も含めて八年間ないし九年間の成長を見通すことが容易にできるということです。

また、しらかば林に登り、幹に太い丸太をしぼりつけたり、なわばしごをつるしたりダイナミックな対応ができるのも子どもたちに活動の幅をもたせてやれるようです。

さらに道路に面したフェンスの近くにつるつる山とよんでいる土の築山があります。粘土質の頂上に水をくみ上げ、水泳パンツで子どもたちと泥あそびをしている男子教師を見ていると、そのダイナミックさは、子どもにとって魅力のようです。

⑦ 男性教師と女教師

もう一度浅井先生に、今度は男性教師と共にやっている立場から語ってもらいました。

「四月、子どもたちは多くの不安と期待を胸に登園してきます。安定した家庭の生活から、新しい環境に足を踏み入れようとしている子どもたちにとって、幼稚園へ来ても、家庭と変わりなくお父さん、お母さんが居てくれる。そんなお父さん役が男の先生のような気がします。」

四月より十八年前に、私自身がお世話になったこの園で今度は、保育する者として勤務させて頂いています。十八年前私が男の担任の先生から体験したことを、今また、組ませていただいている先生より改めて感じています。

す。やはり女としての視野、持ち得ている感覚の域では、気づかないこと、できにくいこと（具体的にはまだはつきりとはしていませんが厳しさを持ちながら、寛大な心で見守っていく、待ってみる、又、冒険させてみる等）を自然な姿で子どもたちに浸透させていく。やはり今の私にとっても魅力です。そんな男の先生から、教えていただく毎日です。そして「女性ならではの」の部分も培っていききたいと思っています。」

⑧ おわりに

いろいろと書いてみましたが、私たちは、子どもたちにとって、お父さんお母さんにはなれませんが、なっているといけないと思います。父親のような厳しさやダイナミックさ、母親のようなやさしさや細やかさのある先生であってほしいのです。お互いのよさで補いつつ、子どもたちの成長をうながしていきたいのです。教育の場には、男性教師も女性教師も必要です。子どもたちには、両方の先生がいてやりたいのです。



（信州大学教育学部附属幼稚園）

いろいろなことを教えてくれる子どもたち(8)

村 石 京 子

この稿を書くに当って、もっと五月号らしい話題を見つけた方がよいのではないだろうかと思分迷いました。

けれど結局、今の私の心に強く残っているものの方を記したいという気持があるので、今月も、今現在の子どもの様子や出来事の中から書いていくことにしました。そんなわけですので、季節感のずれ、五月号にお正月の話題などとなってしまうことはお許しいただきたいと思ひます。

○お友だちがお休み

三学期になると、家庭でも園でも気をつけていても、やはり風邪の流行るときがあります。一月のある日の朝は、欠席の電話が次々と入って、私のクラスでも五人程欠席という日がありました。

今日はお休みの人が多くてちょっと淋しいなと思ひましたが、それでも時間になると子どもたちは次々と登園します。朝の挨拶を交したり、母親から言伝てを受けたりしている間に、思ひ思ひに今日の活動が開始されました。もう四才児クラスの三学期ですから、私からの働きかけがなくても、友だち同士でいろいろな遊びをはじめ

ていきます。

あわたらしい朝の一時が過ぎて、ふと気がつくとポツンと一人、今にも泣きそうな表情の子どもがいます。

「あら、K子ちゃん、どうしたの？」と問うと、それまでこらえていた悲しさがせきを切ったように、大粒の涙がポタポタと落ちてきました。この子は三年保育から入園した子どもで、園に慣れるまでは初めは母親から離れられずに泣いたり、自分の要求がはっきり言えない引込思案なところが多く見られましたが、最近はともも明るく元気な様子に変ってきていたのです。近頃は、新しい活動にもよく進んで参加しますし、友だち関係も問題がなくて友だち遊びが順調に続けられているので、その成長を思つて私はとても喜んでいたので。殊に最近の友だちへのかかわり方や、その中でよく笑う楽しげな様子、そして自分で遊びをつくりだしていく創造的な様子などからは、以前のK子の姿を思い出すことはあまりなく、安心していました。

ところが今日の、日頃とはうって変つた心細げな表

情、朝から何も手がつかないといったことはどうしたわけなのでしょう。「どうしたの？」と少し気持が落ちついた頃にまた問いかけると、今度は蚊のなくような声で、「M子ちゃんがないの」と言います。私はアツと思つたのです。

K子の日頃の明るい様子は、M子との結びつきを基本としてつくられているものであり、その安定したものの上で、他の友だちへのかかわりも出来ていたものだと言うことを理解したのです。これはしかし、M子との関係においては、K子がM子に依存していたものではないと、いつも二人の相柄を見る限りは考えられます。フロアとリーダーというようなものではなく、お互い気心の知れあつた仲よしでした。けれど二人で複合されたものによるプラスの作用から、他の友だちへの働きかけもつくられているものであつたとすれば、K子が一人になつてしまつた今日は、また以前のように心細く、不安定なK子にもどつてしまつたのです。

外側から見て大丈夫と思つていても、まだ内面的には

変っていない部分があるのだということを、私自身も気づく折でした。でもいつも、M子と一緒に行動出来るとは限りません。K子は今日、それを乗りこえていく機会としてもらいたいと考えました。

もし今日が入園当初なら、K子が困っていれば私は手をさしのべていきます。そして友だちのつなぎをつくっていけるように、働きかけます。けれど今はもうすでに一年間と二学期間という月日が経過しているのですから、ここですぐに私が手を出してしまうのはどうなのだろうかと考えました。むしろ、K子が自分の力で他の子どもと遊ぶきっかけとなつてほしいと思いました。それで「今日はM子ちゃんは風邪でお休みなの」とだけ言って、次のK子の行動を促す働きかけは何もしませんでした。

暫くは途方にくれたようなK子でした。そして「Kちゃんどうしたの?」とか「一緒に遊ぼう。」という声がかかって、K子は年小級のときのように、いや、いやをしています。私は待つことに心を決めました。もうその

ことは事件とならないようにさりげなく見て、その間にも「これ、やって。」などと言ってくる他の子の要求にに応じていく態勢をとったのです。そしてその間に、K子の様子の変化を待ってみました。

K子は一とき落ちつかぬ心細げな表情でいましたが、やがて気持がおさまったのか周りを見たりしています。もう大丈夫かなと思っていたとき、全くタイミングよく、ままごとのコーナーからS子の声がかかりました。

「Kちゃん遊ぼうよ」K子はその声を待っていたかのようになり、ままごとの家に行つて「入れて」と言いました。

これは、S子の呼びかけがきっかけになったとはいえ、

K子自身の気持から出た言葉だったのです。そしてままごとコーナーでは、K子も含めて四人の女兒たちの役割とりきめがあったり、誕生日ごっこ遊びなどが進められていきました。ロケにいろいろ言っている中に、K子の声もポツポツと聞こえてきます。私は安心すると同時に、「誰ちゃん遊んであげてね」とか、「Kちゃんこれこれして遊びましょうよ」などと子どもたちの行動に対して

はやまった誘導や押しつけをしないでよかったなと思いました。何故といって、大人ではなくて、友だちが助けてくれたという動機のもとに、状況を変えていく努力をK子も行なったということは、二つの大きな意味をもっているのですから。

私は安堵して、別のグループの製作などに打ちこむ気持になりました。そして暫くしたとき、S子が走って来て弾んだ声で言いました。「先生、先生、Kちゃんが笑ったのよ。さっきまで泣いてたけど、今日幼稚園に来てはじめて笑ったのよ」と自分もニコニコしながら言うのです。友だちだって夫々のところで遊んでいながらも、K子のことを気にしていたのでしょう。この言葉は、四才の後半になると、もう自分のことだけでなく、随分と友だちを思いやる心が育っているのだと教えてくれ、とても嬉しかったものです。そしてそれだけ、友だち関係が深くなってきたのだということを知りました。

帰りしなに、私はK子にそっと聞いてみました。「ねえKちゃん、今日楽しかった?」「うん」とニコリし

ながら、K子はうなずきました。次の日もM子は欠席でしたが、もう何事もなくK子はS子たちと遊んでいました。更に翌日、M子が登園し、K子とM子の関係、そして他の子どもたちへのかかわり方は、一見元の状態にもどったように見えましたけれど、これは決して元にもどってしまったのではなく、K子の心の中には一歩前進したものがつくられているのだと私は考えているのです。

○お正月の挨拶

話は前の項よりさかのぼって、三学期の始まりの日のことです。始業式には、年も改まって初顔合わせの日のこと故、親も子も気分を新たにしてい、いつもより丁寧な朝の挨拶がとりかわされます。「明けましておめでとうございます」と改まった口調で言う子どももあれば、今日から幼稚園がはじまったという喜びを顔中に表わしながら、「先生、お早ようございます」と張りきった声で言う子どももあります。私は「おめでとう」と言う子どもにはおめでとうと返し、「お早よう」と言う子どもに

は「お早よう」と言葉を返しておりました。

そしてクラスの子どもたちが揃ったので、今度は遊戯室において三学期の始業式です。「それじゃ、これから園長先生と一緒に新年おめでとうございますをして、今日から幼稚園がはじまるので、そのお話をうかがいましょうね」と言って並んで出かけようとなりました。そのとき「先生」という呼びかけ。声はJ夫でした。何か用事かと思い「なあに？」と問うと、とても真剣な顔で「あのね、僕の家ではおじいさんが亡くなったので、おめでとうございますが出来ないのだけど、何と言えば良いの？」と聞くのです。実は私も今年は喪中のため、こちらからの年賀はいたしませんでしたが、子どもへの応答は普通にしておりました。むしろ人前ではそのことを現わさないようにと努めておりました。けれどもJ夫の言葉で、急に胸がジンとしてしまったのです。

きつとこの子の家庭では、きちんと理由を話して、今年のお正月のあり方を子どもにも理解させてあったのでしょうか。家庭で教えられたこと、けじめを守ろうという

真面目さが伝わってきました。「それじゃ、Jちゃんは今日はだまって御挨拶すればよいわね」と言ったのですが、そっと見ていると全員でおめでとうをかわしたとき、J夫は本当にだまって頭を下げておりました。その様子に私はまた胸を打たれたものでした。

〇いろはかるた

今度は面白い話題を一つ。お正月過ぎはクラスでも、羽根つきや凧上げ、かるたとりなどが盛んです。童話かるたなどを何回かくり返しやっていたある日のこと、Y子が自分の家から「犬棒かるた」というのを持ってきて「これをやりたい」と言います。

見せてもらおうと私が子どもの頃あった「いろはかるた」のことで、言葉が昔ながらのものであるのは勿論のこと、絵も何やらクラシック調です。あら、またこんなものが出てくるのかとなつかしかったり、驚いたりしたものです。「家にもそれがある」と言う子どもが他にも何人かいて、早速「犬棒かるた」とりとなりました。家

にあると言った子どもの中から、一人読み手が立候補してきました。読んでもらうと、成る程自分で名のりでただけに中々の読み上手です。「いぬもあるけばぼうにあたる」「ろんよりしょうこ」「はなよりだんご」すらすらと読んでいます。「よしのすいかでんじょうをのぞく」「えてにはあげ」あれ、あれ、何のことだかわからないだろうな？でも参加した子どもたちは結構楽しそうに、「ハイッ」「ハイッ」とかるたをとっています。わけがわからなくても百人一首と同じで、小さい頃から親しんでいれば何となく覚え、好きになっていくものだからむずかしいことを言わなくても、好きにやっていたればよいのかななどと私は迷ってしまうのです。

そして突然、読み手のU子は言いました。「しらぬがほっとけ」「え?!」と私。U子はすましてもう一度、「しらぬがほっとけ」思わず笑ってしまう私のまわりで、「笑っていないでやりなさい」と子どもたち。

いろはかるたのことわざも、今様にだんだん変わっていくのでしょうか。勿論この子はただ読みちがえただけの

ことかもしれません。でも「しらぬがほっとけ」ならば、正に現代の風調にびったりとも言えましよう。でも、でもやはり、次の時代をになう子どもたちには、しらぬがほっとけにはなつてほしくはありませんね。そしてそのためにも、幼児教育にかかわる人間としては、知らぬがほっとけではすまされないことが多くあるのです。かるたとりをしながら、おかしかったり、考えさせられたりした日でした。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

貝 殻

蕪 木 寿 江

園の子ども達は九時迄に来ることを再び約束する。

五月四日

お母さんに手をひっばられてDちゃんが登園、四のバスも着いてお庭が子どもでいっぱいのところを、口をとがらして入って来る。九時四十五分「いやだと言うのを無理に連れてきたんですよ。出がけに電気屋さんが来るもんだから」と母親がしきりに言う。遅く来ると気嫌が悪く、理由もなく友達をたたいたり遊びの邪魔をする。池を造って砂場で寝ころんでつかり、泥だらけになる。顔から足から洗い、洋服を全部とり替える。徒歩通

五月七日

「昨日はおばあちゃんの家へ行ったのよ」「お父さんと弟と子どもの国へお弁当持って行ったの」連休あけは、一人話したすとみんな競うように話しかける。だまっているDちゃんに顔を向けると、「おれねえ、お兄ちゃんにいじめられていただけ」と、ぼそつと言う。

五月十一日

風が少しあったが、れんげの田んぼに行く。Dちゃんと手をつなぐのがいやだと言ってAちゃんが泣く。Sちゃんに代わって貰い先頭になって歩く。少なくなつたれんげ草も寒い日が続いたせいか今が満開、田んぼの畝の処に寄って咲いている。女の子はお母さんに持っていくんだと言って、たんぼと合わせて花束にしたり、腕輪や、首飾りを先生と一緒につくっている。男の子は青蛙を追いかけるのに一生懸命だ。Dちゃんも夢中で走っている。「蛙は見つけた人のもの？ それとも掴えた人のもの？」と聞く。自然の中につかっていると、それだけで豊かな気持になってくる。

五月十四日

「一人足りない」と言うのでKちゃんのチームに入る。まだサッカーのルールは理解するところまではいっていないが、土の上に大きく石で書いていたスコアを、こんどは「紙になん対なにと書いて」とSちゃんが説明する。ボール紙でつくり、椅子にぶらさげる。Hちゃんが

係になる。ボールが庭の隅まで飛んでいくのでなかなか点数にならない。Dちゃんが「入れてー」と走ってくるのと、Kちゃんが「Dちゃんが入るのならやめる」と言ってさっさと行ってしまふ。他の友達もついて行ってしまふ。Dちゃんと二人でボールを蹴る。

五月十九日

「おい、M夫ー」の声に振り向くと、もうDちゃんのげんこつが飛んでいる。M夫がぶらんこをぶつけたと言つて怒る。「そうじゃあないよ、Dちゃんがぶらんこのうしろを通つたんだよ」と泣きながら話す。隣のぶらんこのNちゃんも「Dちゃんが悪いよ」と言う。「間違えちゃったのよね。こんどは黄色い柵の前を通るわよね」と背中を撫でても泣き声は大きくなるばかり。ぶつかった腕が赤くなっている。Yちゃんが二本の指を舌で濡らしてはDちゃんの腕をぬらしている。何度も何度もつばをつけている。Dちゃんの泣き声も止まってくる。はんかちで涙を拭いてあげると、Yちゃんもズボンのポケット

から自分のはんかちをだしてそれを横にたたんで、Dちゃんのを縛ろうとする。回らないので三角にしてから折りなおして渡すと、Yちゃんがしっかりと一つ縛ってあげる。そして二人して砂場にいき、黙々として山をつくっている。やっとできたトンネルの中で結わいたはんかちの腕がのび、手と手が何を囁やいているのだろう。

五月二十一日

「おはよう」もそこそこに、Dちゃんがぶらんこに走っていく。たいして漕ぐわけでもなく座っている。隣のぶらんこが空くと急いで鎖を握り、二つのぶらんこを独占する。バスが止る度に門の方を見るが、同じ姿勢で座っている。やがてYちゃんの姿が見えると「おーい、ぶらんことおいたよ」と叫ぶ。二人でしばらく漕いでいる。

五月二十三日

Dちゃん、ぶらんこに乗ってYちゃんの来るのを待

つ。きょうは立ち乗りで勢よく漕ぎながら、ときどき門の方を見ている。Yちゃんが来ると、さっと自分が降りて乗せる。揺れるぶらんこに向ってDちゃんが何かしゃべっている。Yちゃんの傍にいと安心したような顔になる。

五月二十五日

Yちゃんがビニール袋の一つ取りに来た。Dちゃんがビニール袋を二つ取りに来た。同じ遊びを二人しているのに、二つ取りにきたDちゃんが嬉しい。Yちゃんの手でいった袋をDちゃんが返しに来る。砂の中のちいちゃな貝殻を見つけては、自分の袋とYちゃんの袋に入れている。四月に転園してきたYちゃんもDちゃんのおかげで外で遊ぶようになる。

五月二十六日

T夫がM子を泣かしたと言ってDちゃんがT夫の髪の毛をひっぱって離さない。「だってこいつが悪い」と言

ってあとにひかない。朝遅く来るとどうしても調子が悪いような気がする。きょうはYちゃんの家へ行く約束をしたんだとみんなに言っている。「お母さんのおっぱいの病気（乳腺炎）が癒ったんだよ」と言うが、二十分余りもかかるところまでどうやっていくのだろう。

五月二十八日

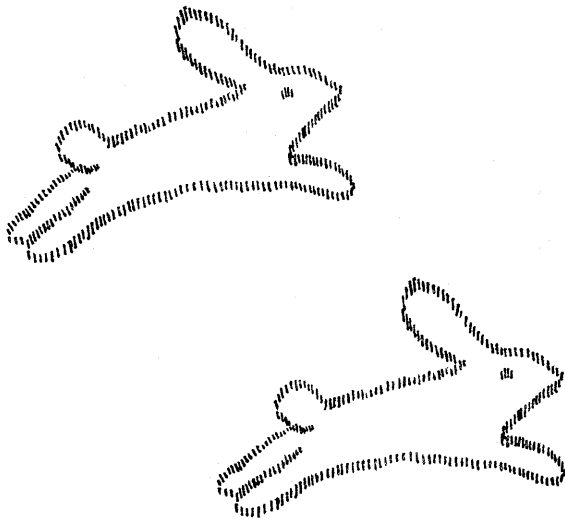
Dちゃんが「Yちゃんと絶交切った」と言う。すべり台に乗るのに、あとから上って、先にすべるからいやだとYちゃんが言っている。帰りにはブロックでそれぞれに飛行機をつくって滑走路の上を走らせていた。「きょうはYちゃんの家を迎えに行つて僕の家で遊ぶんだよ」と話している。

五月三十一日

「六時に起きたんだよ。おばあちゃんがパンを焼いてくれたの」とDちゃんが私の腕の中で話す。九時迄に来ると走つて来るDちゃんを抱っこして頬べたをつける。

（少し位、遅くなつてもおまけをするが……）母親にとつては一才の弟がいて大変だろうと思うが、口で約束するよりもずっしり重い抱っこの方が、お互いに身に応える。

（神奈川・市が尾幼稚園）



教育実習ノートから

◆MさんからK先生へ

○月○日（月）はれ

○卒業した園で、実習できるのが嬉しくて、何日も前から楽しみでした。そのなつかしさのおかげで、すんなりと子どもの心に帰ることができました。

今、この子はこの遊びに熱中しているな、言葉はかけない方がいい、とか、リレーのルールはわからなくても、バトンを持って走るだけで勝ち負けは関係なく、何度もおもしろがって走る子ども達の気持がとてもよくわかりました。

年長さんは砂場の上のぶどうを、脚立に乗って取っていました。お弁当の時に、一房の半分ずつ分け

ていただきました。

◆K先生からMさんへ

○卒業生が、時々、園庭のベンチに、腰かけている時があります。大人はもう子どもにはなれませんが、子どもになろうと努め、何度でも脱皮を繰り返していった下さい。聖書の中にも「幼な子の如くならむば、天国に入るを得ず」という言葉があります。ぶどうの味……如何がでしたか。化学肥料など使われていないホンモノの甘さだと思います。本物に出会えるように、自分自身が本物になろうと努力していった下さい。本物でなければ、本物を知ることとはできないのですから——。三週間が、意義ある日々でありますように。

◆MさんからK先生へ

○月○日（金）はれのちあめ もも組

○きょうは参観日で、運動会の親子遊戯をしました。みんな嬉しくて、お花の体操も上手でした。あこちゃんと、かずまさちゃんは、お母さんが見えず、私と三人でおどりました。あこちゃんのはのってきませんでした。ふだんから独占欲が強く、私がほかの子と遊ぶと、ものすごく怒ったり、泣いたりします。どの子の気持も満してあげたいのですが、何もできなくて悲しくなります。

◆K先生からMさんへ

○あこちゃんは七月に赤ちゃんが産れて、何か不安定な状態なのです。性格とか環境によって違います。多かれ少なかれ動揺します。こういう場合、その子どもの要求を100%聞いてあげたいと思います。誰だって困っているときに、話をきいてあげたり、遊んであげたり、背中をさすってあげたりして可愛

がってあげれば嬉しいでしょう。どうぞあこちゃんの言うことを聞いてあげて下さい。そうすると、あこちゃんも先生の話をきいてくれるでしょう。

◆MさんからK先生へ

○月○日（月）はれ もも組

○あかねちゃんと砂場にいると、あこちゃんがきて、せっかく作ったプリンをこわそうとしたので、「あこちゃんはこの作りの作るとしても上手ですよ、ここに作ってみて」と言うと、しばらくして作りはじめました。「一緒に木の実を拾おう」と言うので、拾って持っている、他の組の子が、どこかに落ちていたかを知りたがっていたので、「あこちゃんはとてもいいお目々なの、先生より沢山拾ったのよ、あこちゃんに教えてもらってね」と言うと、いつもは、「先生行つてよ、先生、来てよ」というのに、一人で得意になって教えに行きました。その

後も、お友達に分けてあげたり、「家に持って帰って弟にあげるの」と言っていました。あこちゃんを認めてほめてあげたのがよかったのか、運動会の練習も、フラフラしないで最後までやっていました。この園の先生方は、とてもよく子どもを見ていてほめることが多いと思います。子どもにとっても、先生にとっても、嬉しいことでしょう。

◆K先生からMさんへ

。あこちゃん、よかったですね、本気で愛すると、子どもにわかって貰えるものです。「愛」というものは不思議なもので、一人の子どもを真剣に愛することのできる人は、ほかの子どもも愛せる人なのです。一人の子どもをおろそかにする人は誰も愛せない人です。例えばお散歩に行つて、三十人中、一人が迷子になったら、その一人の子どもを探すでしょ

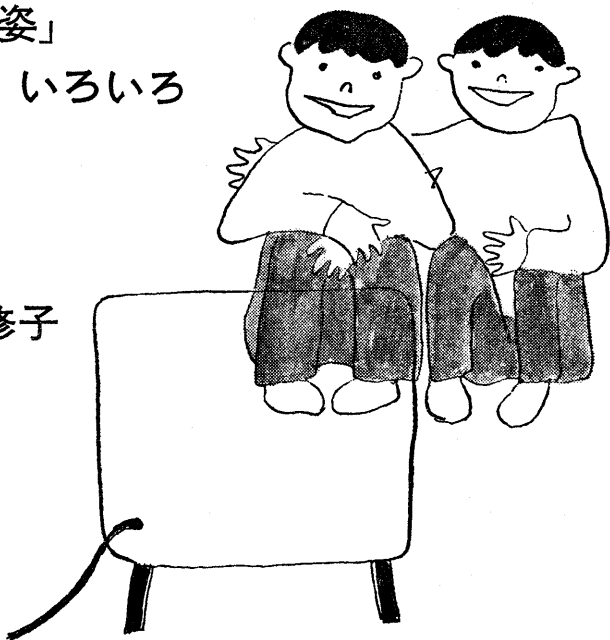
う。探している人の姿に、心に共鳴して、二十九人はじっとして待っているでしょう。愛は湧きいずる「泉」と同じです。新しい水が汲めどもつきぬ程、溢れてくるでしょう。



「親の姿」

いろいろ

村田修子



ある日曜日の昼近く、玄関のドアがバタンとなつて、ドタドタという子供の足音、ガヤガヤと張りのあるにぎやかな声がして、二年生の子が友達をつれて帰つてきた。一年生の弟を交えて、ひとしきりににぎやかなこと。

自分の経験を思い返してみても、学校のない日、学校が終つたあとなど、「○○ちゃん、遊ぼう。」と声を掛けてさそい合つて遊びに入る。声を掛けて呼んだとき、どういふ返事が返ってくるかと、胸をドキドキさせて待つていて、承諾の返事だとうれしくてたまらなかつた思ひは、今でもひしひしと思ひ出される。

ところが私のまわりにいる幼い子供達の様子を見ていると、先ず遊び相手に電話を掛けて「○○さんのお宅ですか。○○君いますか。Aですけれど○○君お願いします。ああ

。君。A だけど、いま遊べる？」こういう交渉から始まる。これは、私が小さかった頃にはとても思い及ばなかった事である。それが、「外へ行ってきました」といつて出て行った子供が、遊べる友達を探し当てて連れてきたので、邪魔をしないように遊ばせてやろうと思って隣のへやを提供した。

子供達は今はやりのおもちゃで暫く遊んでいたが、次第に人恋しくなるのか私のいるへやの方におしかけてきて粘土遊びを始めた。幼児期ならば粘土をやっても、自分の好きなものを作ること満足するけれども、一、二歳年が多いと、作るだけではなく、他のものへと関連を持つ遊びに発展していく。

一人は肉屋、あとははんこ屋と魚屋になったらしく、お互に売る物を何やかや言いながら作っている。或る程度品物が出来ると相手がほしくなるらしく「電話を掛けて注文して」とまわりの大人に促す。

そこで、まあ専門家という部類に入るおばあちゃんたる私は「このときだ」とばかりに「何のお店が出来たの

ですか」と電話を掛ける様子をして相手になると、気が盛り上っているときなのですぐにのってくる。そこで、「ではお肉を下さい」というと小学生のことなので「おいくら」とか「どのくらい」とかいう量的な質問が出てくる。またそこで「〇〇円のを二百瓦」とか「〇〇円のを五百瓦ではおいくらですか」「いまこまかいお金がないので三百円でお払いますからおつりを持ってきて下さい」「おつりはいくら持ってきてくれますか」というようにみえみえでんわで話し相手になってやると、ひとときわ静かになって計算をしたり、友達と相談しながらやっている。こうなることは当然予想していたことであつたが、これだけのことでいろいろな事を感じた。

先ずうちの子供達は、私の話しの持つてゆき方になっているのか、よそゆきのように電話をかけてもすぐそれと同じ調子になれる。そのとき私が一人の友達に「あなたはなに屋さんですか」と聞いたり注文したりすると、最初はニヤニヤと笑いを浮かべたり、からだをくねらせたりして恥かしそうな様子をしたが、周囲のみんなが真

面目な様子でやっているのをみたせいか、すぐに電話をかけてきたり、紙でお金を作ったりしてお店屋さんになり切った。その子の素直さ、子供らしさを失っていないかった様子を見て、他の人をあざ笑ったり、むやみに反対する子供の多い昨今であるだけに大変うれしく思うと同時に、こんな調子で子供に接する親、大人は余りいいのではないかとも思ったりした。

親の立場は様々な事があるので、子供のことにばかりかかわってられないことは分るけれども、子供の興味は一つのことにもそう長く続かないので、ちょっとしたきっかけで先程の例のように計算をさせたり、上手に話をさせたりの指導はできる。これは小学生を相手にした例であったが、幼児に対するときも全く同じで、むしろ年の小さいほうがこういった機会は多い。多いどころではなく、どこにでもある。相手になっても小学生よりは一層可愛らしいし楽しいはずである。近頃は子供の話を聞いてやらす、従って話し相手にもなってあげない親が大変に多い気がする。

連休明けの保育がすんだあと、「今日は子供達の話し相手になってあげるので疲れたわ。みんなが話しを聞いてもらおうと思ってよく話すの。それが途切れないんですもの」という先生の嘆声は、全くそれを物語っていると思う。親にいわせると「話はしますよ」と言うかも知れないが、どうも自分の都合で話し、話題も子供に関係のあることよりも、親自身に関係のある話題が多いと思うけれども、当の本人にはそれは分っていないらしい。この間も遊びにきていた子供に、母親から電話が掛った。子供に「どうしたの？」と聞くと、母親はどこかのスポーツクラブに行くから、〇時になったらそこにくるように、というらしい。子供は言うことをきかず拒否の返事をしている。これ等も親に言わせれば子供をちゃんとさそった、とか、行く場所を子供に教えておいた、ということになるかも知れないが、子供こそいい迷惑で、折角遊びが面白くなってきたばかりなのに、大人ばかりの世界に呼び出されて待たされるのではたまらない。必死にこたわっていた訳が分る。結果としては「〇時まで

お母さんはいませんよ」「いいよ」ということで落着いたけれど、たまたまこういうことになった、というのならともかく、今の若い母親にはこういうように自分の都合で事を運ぶことが多過ぎるといえる程、いろいろな事で身勝手である。

再び買物ごっこの話しに戻るが、私が相手になって、「一箇いくらのを○箇下さい。いくらですか」というように掛け算をさせたり、引き算をさせたりした事も学校からのニュースをちらりとみてその子供が今どういう事が出来るようになっていくか、どの程度の事柄を知っているか、ということを知っていたから、その子に合った相手をしてやる事が出来たのである。こういう点も幼児一人一人に適した指導が必要である、といいながら、一番よく知っている筈の親の扱いは、たいていうまくないことが多い。幼児という年令を考えず「私の子供は気が弱いからいつも叱咤激励して前へ押し出すようにするんです」等々、結果ばかりを変えようとする。そうなると思うための工夫は二の次になってしまい、子

供の方も親が見ているときはそうする、とか、親に言わなければならない、というように裏表ができたり、受身にばかりまわるようになる。

原因を考えたやり方を試みて、その子に合った方法で子供と共に見出していく、こういうようなゆとりが親にもほしい、と思う昨今である。

長い間に数多くの親と接してきたので、いろいろな親に関係ある事柄を書く、ということになっていったが、最近身近にあったことを取り上げてしまったので前おきが太分長くなってしまったが、保護者と接するとき、誰でも同じように、と心掛けているが私も人間なので話し易い人、何か心が開けずに話にくい人とかがある。

話し易い親について考えてみると

- ものの考え方、物事への対処の仕方が同じようである。

- 子供と同じように、母親一年生、という感じで、話しをしたことに新鮮な対応をしてくれる。

●子供を育てることに意義を感じ、子供というのは不思議なもので、その大仕事に今自分はたずさわっている、という自覚を持って、子供と共に学ぶという態度で成長している。

●自分の子供だけを見つめるのではなく、同じ子供であるまわりの人や物にも目が届く広い視野を持っている。

これ等の事がみなそなわっているということは人間としてはすばらしい、完全な人、ということになるけれども、総て何等かで関連のある事柄だけにこの中の一つでもそなえていれば、向き合って話しをしているうちに次第に分ってくれる類である。

逆に、話のしにくいタイプというのは、

●子供のことにについて話しをすると、何でもすぐ分った、という合槌を打ってくれる。余りに調子よくすぐに分った、ということは、たしかに頭で、知識として分ったので分った事に安心し満足して、その先のそうなった原因についてまでの突

っ込んだ話しが進まず、から回りしてしまうことが多い。

●子供のことにについて、「集団の中でどのように過しているか」「どうであろうか」と一応義務的に聞きにくるが、すべてにうわべだけで、返事したことについて何の関心も示さず、心を開かぬままただ聞いている、というだけ。

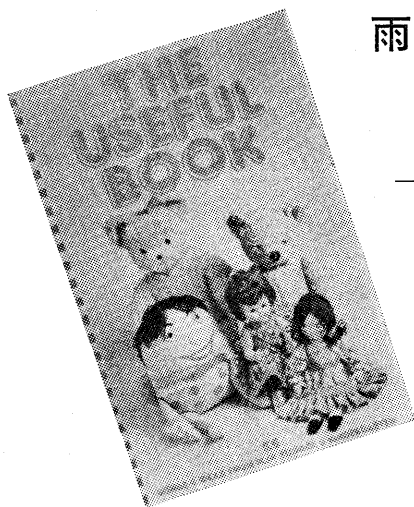
●自分の考えのもとに子供にさせていることに大変自信を持っていてそれをまげず、子供への影響について考えようともしない自信過剰型。例……三歳のときからクラシックの音楽会に子供を連れて行った、という母親（そういう情緒的な面のことも考えて育てているぞ、という自信がぶんぶん）。「最近の子供にいわれるんです。この頃音楽会につれて行ってくれないね、って」（うちの子供はよく覚えているのだ、という満足感がいっぱい）。「そのときお子さん静かに聞いていられました？長い時間はむずかしいことですかね？」といっ

てみると「始めはいいんですけど、お菓子をやっぱり大変でした」とやっと本音が出てきて、私は「ああよかった。当り前のことなのに」と思うこれは音楽会につれて行くことがどうの、というのではなく、その家の生活全体の傾向がそうだから心に引っ掛ってくる。親の考えたことに合わせられて成長する。子供は親が喜ぶからそれに合わせる。そのことは親は知らない。子供の心の中には次第に満たされないものがた



まってしまう。何年かたってその子が学校の帰りに仲々家に帰らず、駅などで遊んでいて「家には早く帰りたくない」と言っている、ということが耳に入ってきた。やっぱり、という思いでいっぱい。これ以上の悪い事態にならないければよいが、と離れたところから思っている。私に対して表面的には同じように向かってくる人達だけれど、本当にいろいろな親がいるのだ、いつも感心してしまう「親の姿」である。

(洗足学園)



雨の日って どんな臭い

——オーストラリアの
テレビ・ラジオの
プレーブック紹介

小澤 誉子

庭先には、アーモンドの白い花、黄色の毛糸のボンボンのようなワトルの花があふれています。広々とした公園にあるのは、縁の芝生だけ。コンクリートの動物も、大人の考えた子どものための遊び道具などは、ひとつもありません。

自然は、自然のままにあるのが一番。これがオーストラリアンの信念です。この信念は、子どもを見守る大人の眼にも現われています。子どもの子どもらしさを大切に、子どもの傷つきやすいまっ白な心を、できる限りやさしく、はぐくんでゆきたいと願います。こんなオーストラリアンの姿勢が見られるプレーブックを、ここにご紹介したいと思います。

それは、オーストラリア放送協会（ABC）が出版している「The Useful Book 役に立つ本」と実に、ストリートなネーミングの本で、入園前の子ども、及び、園児のための歌と遊びのアイデアが、いっぱいのもっています。

す。この本を作るにあたっては、小児病院のスタッフ、幼児発達の専門家、母親グループ、及び、子どもに関わりを持っている人々の意見を十分に取り入れるため、何度となくミーティングが持たれ、長い時間をかけ、完成されました。もちろん、子ども自身の意見も反映されています。片寄りのない本、オーストラリアに住んでいるいろいろな異なった文化を持つ子どもたちすべてが楽しめる本、それが企画スタッフのねらいです。この本にのっている歌や遊びは、ABC局のラジオ、テレビの子ども番組で応用され、それを聞きながら、一緒に遊ぶことが望まれます。

ABCの教育担当のスタッフは、その道二十年の大ベテランで、子ども向け番組担当になってから、結婚、出産、育児を経験し、子どもの成長をすぐ横で見ながら、自分の体験も番組作りに役立てて来たのです。すでに子どもは成長し、「後は孫だけ」と微笑む顔には、自分の担当した番組への、自信と誇りが感じられました。例えコンピュータが生活の中で当り前になっても、宇宙に飛

び出せるようになって、人間が、子ども時代に経験したいこと、それは変わらないというのが、番組作りのポリシーです。ですから、三年前の番組の再放送などは当り前。日本ではとても考えられないことです。「子どもが変わるから問題ない」という考え方に、オーストラリアらしさを感じてしまいます。前置きが長くなりましたが、本の内容をご紹介します。

歌や遊びは、子どもの日常生活に密着しています。朝起きてから、ベッドにはいつて眠るまで、子どもがその日体験しそうなものに結びついています。例えば「夜」ベッドへ、という見出しで、こんな歌がのっています。

小さな坊や

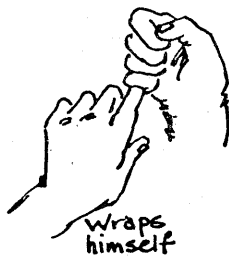
小さな坊や　もうおねむ

マクラの上に頭をのせて

しっかり毛布で体を包んで

さあ　そうやってぐっすりお休み

朝になったよ　目を開けて



毛布をけとばせは
ね起きろ

洋服着たら でき上

がり

一日 遊ぶ準備は完

了

(この歌には指遊びがつ
いています)

さて、各ページには、

大人へのちょっとしたア

ドバイスがされています。

す。ここでは、『時々、

子どもは、眠るのをこわ

がります。ひとりぼっち

にされるのが不安だった

り、暗闇がこわくなった

り。例えそれらが何に

も危害を加えないことを

子どもたち自身わかっていたとしても、こわいものなの
です。

解決方法

●子どもが落ち着くまで、そばにいて、お話をしたり、
歌を歌ったりする。

●子ども部屋のドアを開けて、家族が動く音、テレビ、
ラジオの音が、小さく聞こえるようにする。

●ナイト・ライトを付ける。

●子どものお気に入りのおもちゃを持たせる。

●夜のお友達を作る。例えば、月、星、街灯など、

子どもが、孤独を感じさせないような工夫が見られま

す。さて、次は、『雨の日』です。

『 アドバイス欄

—— 雨の日、外に ——

雨の日外に出ると、とても面白いものが見られます。

例えば

●雲を見て下さい。いつ雨が降って、いつ止むか、雲を
見てあてられますか。

● 溝に、木の葉をうかべて下さい。

● どんな道をたどって、水が流れるか見て下さい。

● 雨だれが、水たまりではねかえるのを見て下さい。

また、もし雨が止んだら、子どもに、水たまりの中に、自分の姿をうつすように導いて下さい。

● もし太陽が姿を見せたら、太陽に背を向けて立って、空を見て下さい。虹が見えますか。そして子どもに、雨が上がると、すべての物の臭いが違ってくるのを、気づかせて下さい。町の臭いも変わっています。

—— 雨の日、家の中で ——

子どもの中には、おもちゃを持ちすぎている子がいます。その中のいくつかは、ふだん使わずに、雨の日だけに使うようにしてはどうでしょう。

さて、一日中家の中にこもっている子どもには、エネルギーを発散させる機会が必要です。そのためのアイデアとして、

● 家具、古い毛布、シーツを使って家を作る。

● レコードやテープをかけて、ダンスをする。

● 古いバンテーストッキングを使ってボールを作る。

足の所をまるめて、丸い形を作るようにする。投げ合っても家具は傷つかないし、安全。

● いつもより手のこんだ方法で、絵を描く。例えば野菜を使ったり、大きな紙をバスルームの壁に張って、壁画風に絵を描く。あるいは、ガラス窓や鏡に描くのもいい。

● アクセサリー作り。マカロニに糸を通してネックレスを作る。ストローを切って糸でつなげブレスレット。アクセサリーができれば、うんとドレスアップをして……。

雨の日は、大人でも気分がブルーになってしまいがちです。まして、子どもにとって、思い切り体を動かせないのは何よりつらいこと。いくらイヤだと思っても、雨の日は必ずあります。その雨の日を、いかに楽しく、ワクワクするものにするかが考えられています。バスルームのお絵かきは、広いウェスタンスタイルの浴室だからこそできるものかもしれません。浴室に限らず、オースト

ラリアの住宅事情は、日本よりかなり良く、子どもが家の中を走りまわるスペースがあるのは、子どもにとって幸福と言えましょう。2DKの家具に囲まれた家の中を、子どもが走りまわると、大人はついイライラして、「静かにしなさい。ほこりが立つでしょ」と大きな声を出してしまいます。狭いスペースに、一度にたくさん動物をいれると、それぞれがイライラしてくる、と言われます。雨の日は、ブルーな気分の大人と子どもが、じっとして、お互いのイライラをつのらせやすい状態です。オーストラリアの子どものように、バスルームの壁いっぱい大きな絵がかけたら、どんなに気分がスツとすることでしょう。

ABC（オーストラリア放送協会）の子どものためのブレイブブック、ほんの一部をご紹介します。



八年間にわたり「幼児の教育」の編集にたずさわったベテランの皆川様より、

この大役を引き継ぎ、やっと二回目の編集をなんとか終え、ほっと息をついている私です。児童学科を卒業してからは、子供とのおつき合いも薄く、いざ編集をお引き受けしてみると、まるで暗闇を手さぐりで歩くような危かしい足どりで仕事を進めております。

様々な分野の異ったお立場の先生方へ、原稿をお願いし、より大きな視点に立った本にしたい、などと当初大望を抱いておりましたが、回を重ねる毎に編集の仕事のむずかしさを感じております。

例えば、ある企画を立て、いざその専門の先生に原稿をお願いした所、お忙しいとのことではなかなか応じて頂けない時。また、毎日ポストを開ける前に「今日こそは、届いていますように……」と祈るにもかかわらず切り日を過ぎてもお願ひした原稿が届かない時。どうやっ

てページを構成したらよいのか途方に暮れてしまっています。

また、入稿の日が迫っても、どうしても原稿が揃わない時は、フレーベル館の担当者の顔が、目の前にちらつき、「まだご迷惑をかけてしまう。」という罪悪感にさいなまれてしまっています。

「後何回かすれば馴れて、もっと編集作業もスムーズに進み、原稿依頼のコツも体得し、精神的には楽になるに違いない。」と目を励ましてはいるものの、なかなかそう簡単には行きそうにありません。

いろいろな方々にお力添え頂きながら、今後も歩んでまいるつもりでおります。何とぞよろしくお願い申し上げます。

(誓)

幼児の教育 第八十四巻 第五号

五月号 ◎

定価三五〇円

昭和六十年四月二十五日 印刷
昭和六十年五月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

一斉指導で楽しく展開する

幼児の運動(全3巻)

近藤充夫・中西雄俊・石渡敬一・渡辺真一 共著



1. 大型遊具を使って 2. 小型遊具を使って 3. かけっこ・プール・ 運動会

一斉活動でのびのび育つ
幼児の運動遊び集大成。
保育を楽しくする画期的
な全3巻です。

- 豊富なイラストと適切な文章で、指導の方法が一目でわかります。
- 遊具別に分類されているので、例えば「平均台」でどんな遊びができるか、すぐにわかります。
- 一つの活動に対して応用例がたくさん示されているので、園の実情に合わせたり、創意工夫したりするのに大変役立ちます。
- 「うまくできない子ども」への配慮も充分にしてあるのが、本書の特徴です。

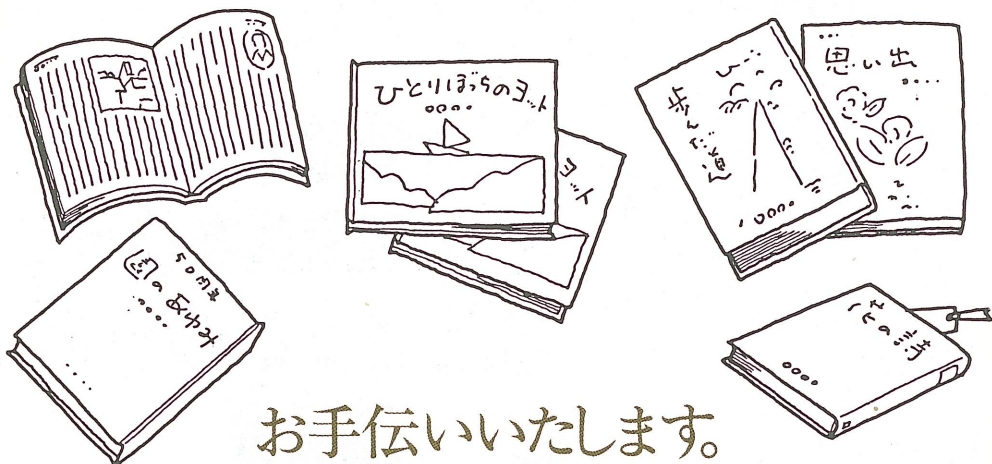
B5判・各200頁・定価各1,800円・セット定価5,400円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

記念の本づくりを 自費出版 なさいませんか。



お手伝いいたします。

●内容、装幀、部数など思いどおりになる自費出版。手間のかかる編集作業は、キンダーブックや優良保育図書、雑誌などを手がけてきたプロの編集者がすべてお手伝いいたします。

●お気軽にご相談ください。

●完成したご本については、小社の宣伝ルートを通して全国にご紹介いたします。

- *****
- | | | |
|--------------|---|--|
| 1. 本の内容は | 自叙伝、童話集、絵本、園の記念誌、研究集録、随想集、作品集など、ご随意に。 | は、上製本から並製本カバーつきまで各種あります。お好みのままに。また表紙などはご希望のセンスを尊重してご相談に応じます。 |
| 2. 製作部数は | 1,000部以上がお得です。 | |
| 3. 製作期間は | 原稿頂戴から完成まで、約3カ月見てください。 | |
| 4. 本の大きさや体裁は | ……大きさはB6判、B5判、A5判など。製本 | |
| 5. 本文は | 原稿用紙に書かれたものでも、テープに吹きこまれたものでも、結構です。綺麗でわかりやすい組み方にいたします。 | |
| 6. 絵や写真は | もちろん結構です。カラーのご相談にも応じます。 | |
- *****

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館 記念の本づくり係 〒101 東京都千代田区神田小川町3-1
TEL 03-292-7788

(ご連絡はお近くの小社代理店・事業所にどうぞ)